
理想の女性に、変身したかったわけじゃない。

のーちやる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想の女性に、変身したかったわけじゃない。

【Nコード】

N1196X

【作者名】

のーちやる

【あらすじ】

天使からの質問に答えたがいいが、俺の理想の女性像に変身させて異世界へ飛ばしてくれた。
俺を元の男の体に戻し、元の世界へ帰せ。

理想は想像、希望

俺は高校までは、自分では平凡に生きてきたと思う。

この中高の時期は、とにかく勉強一色で恋愛も出来なかったのでモテるわけでもなく、グレーな学校生活だったさ。

身なりに気を使うこともなく、ただ進学の為だけ。

彼女を作れたかったが、理想の女性を求めると誰もいない。

自分もダサいし、俺も磨かれなくてはならない。

大学進学と共に理想の男になるべく、モテる為の努力を始めた。

やはり体力のある男が好かれると思い、よくランニングに励んだ。長期休みに運転免許もとった。

レンタカーくらい借りられるものがないとね。

真面目な髪形も変えて、固いイメージだったメガネからコンタクトへ。

世界がこんなに色があつたのかと思うほど、視力を妨げるものがない。

どこからどう見てもイケメンに入る部類になんとか圈内。

センスを磨くため、センスの良いカフェでバイトして、俺は何人もの女性に告白され

モテることに浮かれ調子こいていた。

今思うと、ちょっと反省。

ある日、セキユリティーが完璧なアパートで、俺は無防備にシングルベッドで寝ころんでいた。

イケメンになる為に、いろいろ努力しているもののやはり疲れる。

バイトも夜9時までやり遂げ、お蔭でバテバテ。

高校時代までは、親が管理してくれていたから、大変さ。腰も足も筋肉痛を通り越して、疲れが溜まっている感じがして体がだるい。

やっと家についたら10時で、明日は7時起きで大学かあなんて思
いながら

体を投げ出して、眠りこけていた。

完全に熟睡というやつだ。

それなのに、耳のそばで声が聞こえる。

それも可愛い声なのに、お年寄りが話すような言い方。

「お主の好きなタイプは？」

「？」

「お主の好きな女性だ」

「え？誰だ？」

俺に必死に声を掛けてくる不法侵入者は誰だ？

確かにドアには鍵は掛けたはず。

寝ぼけながら目をこする。

「聞いているか？」

あまりに強引な言葉にムツとして起き上がると、可愛らしい天使様
夢でも見てるのかなあ。

見事な白い翼に金髪に青い瞳。

顔は……。

「顔は？」

「ロリコンの人なら喜びそうな可愛い顔だな。俺はそっちの趣味じ
やないから」

（おお、つい返事してたけど、こっちの考え分かったのか？）
まさかなあと思っていると、

「そつだ。分かるぞ」

即答だった。

「げっ」

俺が引きつった顔をさせると、あちらは可愛い幼児顔の頬を膨らませた。

腰に可愛らしい手を充てている。

「最初に言っているように。理想の女性のタイプは？」

「あ・・・うん。」

とにかくまだ寝たいので、サツサと答えようと俺は一応本当に理想の女性像を浮かばせた。

でも、俺の頭に浮かんだのは実際の女性ではなく。

架空に等しい。

「そつだなあ。肌は色白だな。もっちりとした」

色白な少女で同じ歳。

「変態だな」

「・・・。」

傷つくなあ。

「それから？」

可愛い幼児顔なんだが、ちょっと目が釣り上がりそつで、怖いのですけど。

「・・・ただの理想だぞ？クリーム色のふわふわ髪に碧眼てのもいいかな。

スタイル良くて、胸はマスクメロンサイズ。顔は癒し系。料理出来て、腕も立つといいかな。

俺の戦力になる可愛い子だな」

どこかの架空のスタイル良くて、男性が10人いたら10人は可愛いと思う美少女を想像する。
そうそういないよな。

完璧までの理想の女性って。

性格も控えめで、でも自分の意見を言えるのがいいかなあ。

へへ、想像するだけで顔がにやけてくる。

「マスクメ・・・すげべだな」

「煩い」

理想は高いだけ。夢なんだよ。

「しかも戦力？」

「そ。一緒に生きて行く相手なら、一緒に人生を闘っていくという
(分かりづらいかな?)」

天使のような子供は、フムフムと頷く。

白い翼はお飾りかな？

でも、実際にいたらやはり天使なのかな？

俺は、大きく欠伸をすると、天使は何もなかった空間から大きな鏡を取り出し壁に立てかけた。

「こんな感じか？」

天使は鏡を見ると俺に指図する。

鏡を見ると、眠たそうな顔をした理想の女の子がベッドで胡坐をかいている。

「へえ、凄いな。こんな理想の女の子が実際にいるんだ。可愛いなあ」

なんて、ヘラツとしただらしない顔をさせると、鏡の女の子も同じような顔になる。

「あれ？」

「お主、立ってみる」

天使に言われて、ベッドから立ち上がり、鏡の前に立つと、鏡の女の子も同じ動きを見せる。

「もしかして・・・」

両手を頬に振れると、鏡の女の子も同じように・・・。

「おい、どうということだ」

振り向いた俺に、天使はにんまりとする。

「お主の理想の女性像だ。文句はあるまい」

「おい。俺本人が理想の女性になってどうする」

鏡の女の子は、完全な美だ。コンタクトが消えていて、裸眼だと気付く。

(目の中のコンタクトが消えてる。)

「まあ、固いこと言うな。あ、と・それからお主には悪いが、友人の天使がお主を見つけれられないように異世界へ移動する」

何気に恐ろしい事を吐く。

「ちよつと待て。話が見えないぞ」

慌てて天使を捕まえて、元に戻せと詰め寄ろうとするが頭の中の考えを読まれているのか、触れることも出来ない。

「つまりだ。お前は努力家でイケメンだ。今までの努力、それは素晴らしいことだ。

だが、天使の友人が婚約を破棄してまでお前と一緒にになりたいと暴拳に出たので、

神から頼まれたのだ」

そちらの揉め事に、俺は巻き込まれたってことか？

「何、それって、俺のせいじゃ」

「そうだ。お主は巻き込まれただけだが、悪いの。お主のいろいろ注文は受け付けた。」

その姿になったことで完了しておる。

それと神の加護もプラスされておる。異世界もいいぞ」

天使は、何もない空間から長いステッキを取り出すと、俺に向かってのの字を描いた。

のの字は空間を歪ませて、広がってくる。

「俺が何をした」

雄叫びと共に、俺は異世界へと落とされたのだった。

拾われました

そんな無茶苦茶な話があるか。
これはきつと夢の中の話。

チチチチ。

実に不自然に静かな中、耳をすませば鳥の鳴き声が聞こえる。
水音もチャプチャプと。

バサバサと空を飛ぶ鳥か何かの羽根の音。
いやいやあのマンションの俺の部屋ではありえない。

手や顔には草の匂いや感触がしている。

ゆっくりと目を開けて、うつぶせになっている自分の体を起こして
周囲をゆっくりと見渡してみる。
自分がいる場所。

そこが部屋の中ではなく、外。しかも・・・。

「なんだ、ここ」

見渡す限りの自然。自然がある。自然だ。
どう見ても鬱蒼とした木々が生い茂る森の中。視線の先方には湖
があるのみ。

今にも熊さんが出てきそう。
頭の中で、ある日の森の熊とお嬢さんの出会いの歌が浮かんでくる。

そういえば山で迷子の時は、なるべくその場を動かないとか、救助を待つとか

いろいろ言われたことあるけど、どう連絡すればいい？

天使は行先は異世界だと言っていたはず。

と、なると

今の俺には山で迷子になった場合の対策は、役に立たない。

ガツクリと頭が垂れる。

どうするんだよ。

大体、天使の友人が婚約解消して、俺と結婚する気だとかどういう話なんだよ。

そんな女知らないし、

俺、全然関係ないし。

しかも、男の俺が俺の理想としている女の子にされて異世界へ放り出すってどんなお仕置きだ。

イケメンになるべく努力した俺はなんなんだよ。

確かにモテて、調子良い奴に見えたかもしれないけどさ。

暴拳吐いた天使に説教してやりたい。

「はあ・・・」

深い溜息が出る。

どこだか分からない異世界の森の中で、ひとり。

「俺、これからどうすんだよ」

今の状況で、何の足しにもならない華奢で癒し系カワイ子ちゃん姿

で、
着ている服は、森には不向きなピンク系のワンピース。
はだして靴すら履いてない。
靴くらい用意してくれてもいいのに。
靴なしじゃ、歩くの困るじゃないか。
古代人のように、裸足の世界か？

文句ばかりしか浮かばない。

元の男の体だったら。もつとマシな体力があつたはずなのに。
なんて弱い手だ。

俺の体。

へたりこんだ状態で、ふと視線が胸のふくらみに注がれた。

胸元には、俺の理想とした見たただけでも柔らかそうな白い肌の・・・。

「胸。しかもマスクメロンサイズ」

両手で出来たばかりの胸を触ってみると、もちもち感があって柔らかい、その重みも感じる。

「へえ、凄いなあ」

マスクメロンサイズの胸をにやけ顔でモミモミしていると、

背後から草を踏みながら歩いてくる、何かの気配を感じて硬直する。

(うわ。自分で自分の胸揉む変態と思われる・・・)

慌てて手を離して、音のする方向へ顔を向けてどうするかを頭の中でシミュレーション。

(熊なら、静かに逃げるかな。死んだふりは通用しないか。何か大きな音を立てるだったかな)

しゃがみこんだ姿勢から、匍匐前進する体制に入る。

ここはなんと言っても異世界。

悪魔とか魔族とか人外的な物に当たれば、どうなるやら。

人間でありますように。

あ、出来れば言葉が通じますように。

小説だとかマンガとかの見過ぎかもしれないけど。

異世界で言葉が通じないと、心細過ぎ。

ガサガサガサ。

大きく茂った草をかき分ける音が聞こえたと思うと、熊かと思うような男が顔を出した。

「うわ」

「わ」

お互い驚いて、お互いが双方を見て凝視する。

「え？女の子？」

「人間？」

これが神の加護なのだろうか。

相手からの質問を律儀に答えてみる。

相手の言葉が分かり、返事が返せる。

（異世界だから、もしかしたら通じないかもと思ったが、良かった）

初めての異世界で出会った人間との交流で、会話がスムーズに出来ることに感動。

だが、相手の男の服装が近代的ではないことに気が付いた。

（まさか。電気とか科学が発展していない時代？）

「どうしてこんな山の中に？しかも靴履いてない？ドレス？」

熊のようなボサボサの頭に髭がモサモサと生えている大柄な山男は、じろじろと奇妙な女の子として観察している。

「ああ・・・、実は迷子で」

「迷子？」

「よく分からないけど、気付いたらここにいるわけで。俺も分からないんだ」

どうにか納得しそうな理由を話してみる。

異世界の話は、頭がおかしいと言われるそうなので、そこだけは控えた。

「え？俺？女の子じゃない？どう見ても女の子に見えるが」

説明を聞いて、俺が俺と言ったところに注目したので、もしかしてこいつ今までの説明よりもそこが気になった？

「あ・・・、今は女です。」

「？」

納得しない顔をされて、元男だとは言いたくもなく、敢えて現状を強調することした。

「女です」

男はようやく納得し、裸足では歩けないだろうと、おんぶしてくれることになった。

背を向けてしゃがみこむ男に少し抵抗はあったものの、今の状況ではどうにもならないと判断し信用することにして、男の背に体を預けた。

男の背は大きく、流石だと思つような鍛えてある筋肉質の体だ。異世界の男はこんな感じだろうなあ。

鈍のような大きな物を腰に差しているので

狩りか木こりだろうかと思像しながら、ゆっくりと歩く男の背から周囲を観察。

「ここがどこかは分からないわけだな」

「ああ」

「ここは、エリクシアル国の北にあるラシエ村。この森は、ルトワナ女神の森と言われている」

「へえ、そうなんだ」

（世界の地理にもない国で、女神の森か。あの天使が言っていた通り、ここは異世界だっただろうか。）

彼は、獵のついでに薪を集める為に森へ入って来たところで、俺に出くわした。

「名前、まだ言っていなかったな。俺は、この国の騎士で村の警備隊をしているユーシイ・ラゼス。」

「ユーシイと呼んでくれ」

「明らかに年上の方を名前呼びは」

（騎士。こんなナリで騎士なのか。熊が狩りをしているみたいだ）

「それなら、好きなように呼んでくれ」

「普段は何と呼ばれているのですか？」

「大抵はラゼス」

「それなら、同じように」

「分かった」

それから彼は歩くことに専念していたが沈黙していたが、

自分の名を名乗っていなかったことに気付き

改めて名乗ることにした。

「俺は、マキト・ナナオカ。マキトで。」

「分かった」

俺を背負っていたこともあり、彼一人なら30分掛かるところを

1時間かけて山を降りると、小さな村に到着した。
人口200人前後という小さな村。
ファンタジー・ゲームを思い浮かべる世界観だなというのが感想だ。
生きて行くには、この世界の常識を知る必要もあるし
この山男に協力を求めるしか道がないかな。
俺はこの先のことを冷静に考えた。

レンガ作りの家や木で作られた家。囲いは木や竹のような物が使われている。

地面は土のみ。

アスファルトなどは、ない。

それぞれの敷地には、ヨーロッパの田舎を思わせる家々と庭。

家畜は豚のような生き物、牛のような生き物に。あれは鶏なんだろうか。

馬？馬のような馬？頭に一本角があって、ユニコーンのような気もするけど

色が茶色系だから馬？

背中におぶわれながら、村の様子を伺うと、あちこちから村民の視線。

「ラゼスさん、その女の子は？」

山男と親しそうな中年の男が、モタモタした感じでやってきた。

「ああ、森で迷子を拾った」

「へえ、それは大変だったね」

俺と目が合つと、おやつという顔をさせて耳を赤くさせた。

「うわあ、これは綺麗な子だな。どこかの貴族の子かな？」

中年の男がラゼスの顔を見ると、ラゼスはマキトへ顔を向けようと

した。

「いや、俺は貴族じゃない。一般の普通のただの人間。」
言い切った俺に、ラゼスは苦笑している。

「だ、そうだ。いろいろ複雑な家庭環境でここに置いて行かれたみたいだ」

「それは、可哀相に」

上手いこと言い逃れ説明をしてくれたラゼスは、自分が詰めている場所。

村の警備詰所、裏手に警備隊員の宿舎で住居へ連れて来た。

警備隊は5人。田舎貴族出身や田舎出身ののんびりした性格の者ばかり。

「へえ、またラゼスさん可愛い子を連れてきたねえ」

「名前は？」

20代2人、30代、40代と田舎騎士という風情の男性に

いつのまにか一緒に着いてきた村人の何人かに囲まれ

躊躇したものの、マキトはラゼスの背から降りるとお辞儀をした。

「初めまして。俺は、気が付いたら森にいて、迷子のところをラゼスさんに拾われた

マキト・ナナオカと言います。行く宛てもないので、仕事が見つかるか

どうするべきかはつきり出来るまでよろしく願いします」

しっかりと先回り挨拶をした。

男性陣は、驚いた様子だが笑っている。

「はは、まあ、ラゼスさんがみるしかないぞ」

「そうそう」

わははと、周囲が笑うとラゼスは焦っていた。

「ちよつと待て。男所帯に女の子はまずい。誰か預かる家はないのか？」

村人たちは顔を見合わせ

「そうだな。それはまずいか」

呼ばれた村長や女性何人がラゼスと話し合い、村長の家で宿泊し警備隊詰所の清掃や食事を作る仕事を任されることになった。

丁度1週間前に隣り村（馬で30分）から通い家政婦をしていた女性、家庭の事情で

辞めたばかり。その後釜に治まることになったのだった。

登場人物

菜々丘 真樹人（ななおか まきと）

18歳。 178センチ 中肉中背 黒髪 黒目 某大学 経済学部

普通の中高生を経て、大学生活はセンスあるイケメンでいこうと努力家の人。

女性版 マキト・ナナオカ

18歳。 167センチ 華奢 クリーム色の髪 碧眼
マスクメロンサイズの胸 料理、清掃が得意
神の加護アリ

エリクシアル国

マキトが最初に落ちた国。

ルトワナ女神を崇拝している。

中世を思い出す世界観

魔術師は多少いるが、使えるものは少ない。

魔族とか魔物はいる。

女神の森

エリクシアルの辺境の地で、民を救ったと言われる女神の生息地だと言われている。

謎に包まれているが、本編で解説されている。

ユーシィ・ラゼス

28歳。 187センチ 大柄 筋肉質 物静か 知識は博識めいた感じ

王都3番騎兵隊隊員 いろいろあって、現在は田舎であるラシエ村警備隊員

中流貴族らしい？謎な部分がある。

ラシエ村の警備隊

辺境の地の為、3年交代の勤務先。毎年ひとりづつ交代していく。

ロツサ 25歳 1年前に配属

ベルダ 23歳 2年前に配属

ターラント 32歳 3年前に配属

バンハト 40歳 半年前に配属

エリクシアル国 王族

王 50歳 金髪 茶目

王妃 40歳 茶髪 青い目

第1王子 クルス 25歳 金髪 茶目

第2王子 ウエン 20歳 茶髪 茶目

第3王子 6歳 茶髪 黒目 (側室の第1子)

第1王女 アリシヤ 21歳 金髪 茶目

第2王女 リーシェ 18歳 金髪 青い目

王族 侍女達

第1王子付き侍女

ラミナ 22歳 食事、清掃が得意

メリア 24歳 身支度、髪形変え、メイクが得意

第2王女付き侍女

サリア 20歳

宮廷魔術師

ベナール・テオ 40代前半。 国で2番目と言われている魔術師。
魔術の力を得る為に、女神の加護を欲しがっている。

隣国 バーシャラン王国

第1王子 ラシャ・ナサラ・バーシャラン
28歳。 ユーシィ・ラゼスとは友人

女の子だつてことが身に染みた。

村長と奥さんに付き添われて、本日からお世話になる家へと徒歩で向かった。

ここで馬車とか角が生えた馬？が出てくるかと思つたら村内では、人にぶつかるのは危険だということでもナシ。

荷物運び専用。馬もゆっくりと歩かせるとのことで、走ることが少ない。

タクシー代わりに使うという発想がどうやらないみたいだ。

「でも、いざという時速く走る馬がいるということとは？」

俺はちよつと気がかりになって不用心さとかセキュリティ面を指摘する。

「はは。こんな辺境の村にそこまで切羽つまるようなことはないですな」

なんつゝ危機感のない。

あまりにも辺境で、女神の森を訪れる年1回の王家訪問くらいしか周辺の村からさえ来ないのだそうだ。

「村の馬はそうですが。駐在している騎士の皆さまの馬は毎日走らせていますよ」

「そうなんですか」

「わざわざ5人も駐在していますからね。一般的には村には2人が3人が通常で

王都との伝達が主だった仕事なんです、この村近くには女神の森

がある為

月4、5人の信者の方や観光にくるので、いらしているそうですよ」

「女神の森・・・」

ラシエ村というのは、1000年程前に戦争から逃れてきた人たちが森に避難してきて

それを哀れに思った女神が、この森の一部である今のこの土地を人が住めるように開拓して薦めてくれた土地らしい。

「その当時の村人の中に絵心のある者がおりまして、残っております。

代々村長になる者が受け継いできていますが」

レンガ作りの平屋が敷地内に3軒という家に着いた。

真ん中が村長の家で、両隣は観光に来る人の為とか。

真ん中に建っている家へ招待され、先ほどの続きの絵の話しに戻り俺は布に描かれた女神を拝んだ。

「美人だ」

女神の崇拜者がいるのは分かる。スタイル抜群で、癒し系美人。

古代ギリシャ風のアレンジ衣装

胸がまた大きくて、男性が好みそうな女神の絵だ。

「何度見ても見惚れます」

村長の奥さんまでが、ほおつと溜息を吐く。

昔村一番の美人だと思わせる顔立ちの奥さんで、柔らかい笑みを浮かばせる綺麗な人だ。

(そういえば、この村には特に太った人っていないなあ。環境が厳しいからどちらかというところ、筋肉が凄いつて感じかな)

夕食は村長家族と共にとり、右隣りの平屋宿泊施設の1部屋を借りて住むことになった。

管理しているのは、村長の家の右隣の家族の人達。左側の宿泊施設は、左側の家が管理しているそうだ。

お風呂はない。大きな桶に温かいお湯を入れて、その中に入り掛け湯をして汗を流し、最後にタオルで体を拭くのが一般的。残り湯は、朝に畑とか庭に撒く。

明日からの仕事を考えて、部屋の中央に部屋に仕舞われていた桶を置き

準備してもらったお湯を3回自分で部屋へ運んでワンピースを脱ぎ、下着も脱ぎ、桶に足を入れてしゃがみこんだ。

(これは、これで夏のような暑い時期はいいけど。

風呂が欲しいな。水を運ぶのが大変で水が貴重ということかな。

川近くにあると便利かなあ)

などと、掛け湯をしながら反省を交えてこれからの事を考えていた。

元が男だったから、何も考えていなかった。

トントン。

ドアを叩く音がして、これはノックだと気づき、了承の返事をして
いた。

「服と靴を用意してもらったから、明日から・・・」
ドアに顔を向けると、入ってきたボサボサ頭の髭モサモサの山男と
目が合った。

「ああ、助かる」

立ち上がりながら答えたら、相手は持っていた物をその場に落と
した。

「どうしたんだ？ラゼスさん」

不思議に思い首を傾げると、大きな音を立ててドアが閉まり、

「鍵を掛ける」

と大声で怒鳴りバタバタと走り去って行く音。

ぱたぱたと桶に自分の体についている水滴が落ちて、ようやく我に
返った。

ああ、素っ裸だ俺。

元男だから、裸になることに抵抗がないから。

今の姿は、色白で癒し系の美女の裸体なわけで。

「おまけに胸がなあ・・・たわわなメロンだし」

全身俺が見たいけど、見られる側になっているのがくやしなあ。
俺って、まるで他人事だな。

自分の体なのに。

ラゼスさん、鼻血出してたら、悪いなあ。

これから気をつけないといけない。
すっかり自分が男の理想の女の子になっていること忘れてたぜ。

次の日の朝。

やたら意識されて素っ気ない態度のラゼスに、マキトが切れることになる。

王族が集合

俺がこの村にやって来て、早一か月。

早朝からパン作りにスープ作りに、騎士達の洗濯、宿舎の掃除に少しづつ慣れてきた。

余裕が出てきたら、宿舎の裏手に家庭菜園ばいのを作ってみた。

食べられそうな葉があれば、根ごと掘り出してきて植えている状態。生活は忙しい毎日で、元の姿に戻ることと元の世界へ戻る事を忘れそうになるくらい今は充実している。

前の世界では、こんなに自分を必要としてくれる仲間はいなかったなあとか

充実し過ぎて、幸せに感じるのは何故なんだろう。

青空に向かって、洗い立てのシーツをパンパン伸ばしている自分。行ってらっしゃいと騎士達に声を掛ける自分。

「この気持ちはなんだろうなあ」

そんなある日。

物凄い早馬が村長宅へ到着した。

俺は、いつものように宿舎で掃除をしていたので気付かなかった。その後、村長と共に伝達騎士は詰所へやって来て、話し合いを始めた。

丁度、キッチンでお昼の準備を始めていて、20代の二番目に若い

警備隊員のロッサが

村長と伝言で訪れている騎士の分も昼食を含めて欲しいとやって来た。

「王族の、恒例の女神の森への儀式の日程が早まったそうなんだ」

「へえ、そうなんですか。俺は今年初めて見ますが、どんな感じの儀式なんですか」

「森の中の湖の真ん中の陸地にある洞穴で、祈りを奉げるというものなんだ。」

王族の何人かが集合して、侍女や護衛を含めて50人位が来て、大変だよ。

宿泊施設は、なんとか泊まれる人数なんだ。

そういえば、村長の右の施設にマキト住んでいたな。

その期間だけ、こっちの宿舎へ移ってくれないか？

男ばかりとお付の侍女軍団と揉めるの嫌だろ？」

侍女同士で揉めることもあったので、村人はなるべく関わらないぞうだ。

「いつごろか、はつきりしている？」

「来るのは、来週。2、3日の内にこっちの空き室に来た方がいい。男所帯だけど、我慢して欲しい。」

今週、担当の家族や手伝いの者達が施設の一斉清掃を思うと」

「分かった」

食後にも荷物を整理した方がいいな。

今日のお昼には、シチューと柔らかいロールパンを出す予定だ。

大鍋からは、いい匂いが始めていて、ロッサが嬉しそうに嗅いでいる。

「うわ、いい匂い。俺このシチュー好きなんだよな」

この村は、基本シチュー系とパンが基本。
日本でいうところのご飯とみそ汁。

シチューを作って分かったが、小麦粉とバターと牛乳で作るクリーム系のシチューは

知らなかったようで、警備隊の中では好評の献立だ。

「こら、ロツソ。中々戻ってこないと思ったら」

宿舎のキッチンに不機嫌なラゼスが現れた。

警備隊全員で、出迎えやら付き添いの警備配置で会議をしていたはずだから

途中で抜けてきたロツサの長居という休憩に、なんのかんと言いながら便乗しているのではと

俺は思う。

「あ、ラゼスさん。不機嫌だなあ。もしかして、王女からの手紙が原因か？」

ロツサは、伝言通達係りの騎士から分厚い手紙をラゼスに渡されていたのを見ている。

その手紙の内容が、ラゼスを不機嫌にさせていると思っている。
「.....」

ロツソが空気を読まずに、マキトの前で話し始めた為、ラゼスはますます眉間にしわを寄せた。

「王女？何かあったんですか？」

俺は何も知らない。

だから、個人的問題なのかもしれないが、ふと口にしてしまった。

「ああ、まあな」

間が空いて、重い口からは直ぐに返事が来ないので、話が続き、

気まずい雰囲気。

「ラゼスさん。ここは、マキトに誤解を招かないように話はした方がいいと思いますよ」

「じゃっ」と、手をバイバイさせてロツサは退場していく。

「誤解？」

マキトが大鍋の火を小さくさせて、ラゼスの顔を伺うと、彼は大きく溜息を吐いた。

「誤解か。ちよつと過去の話を掻い摘んで説明する。実は、俺は元々は王都の第一王子の第3騎兵隊にいた。ある時、王子の狩りに2番目の妹王女が着いて来た。その時、

王女の護衛したのが俺が所属していた隊。

たまたま王子の命を狙っていた貴族の暗殺隊に襲われ、戦闘になった。

その後、俺が王女に着いていたことで何故か気に入られて」

モサモサの頭を掻きだす。

「つまり、好かれてしまつて困ることになった？」

「その通りだ。仕事に支障が出るほど付きまとわれて。俺は半年前にこの辺境に転属させてもらった」

「もしかして、そのモサモサの髪形も髭を伸ばし放題なのは」

「そ。王女が俺と分らないように。これくらい不精していれば、諦めてくれると思つてな」

「その王女が来るんだ」

「ああ、手紙が来た。まだ諦めていないような内容だった」

つまりストーカーか。

2人で考え込んでしまう。

「だから、ラゼスさん。マキトに協力して頂けばと提案しているでしょう」

村長と見慣れない騎士がキッチンへ入ってきた。

そろそろ食事の時間だとロツサともう1人の20代の騎士ベルダ、30代のターラント
40代のバンハトがその後続いた。

「俺に？王女に諦めてもらついい方法でもあるのか？」

食堂へ移動し、スープ皿にシチューを移し、燻製にしたソーセージ、ロールパンを籠に入れてテーブルに置くと男たちは喜んだ。

旨いと食事を始めながら、一緒にテーブルについたマキトへ回避作戦を説明し始めた。

「美人なマキトが、森でラゼスさんに助けられて意気投合し恋人になった」

「いや、婚約者にした方がいい」

「それでは、王女が一言言えば取り消しになるから。王女でも解消出来ない婚姻がいい」

「ちょっと待って下さい。もしかして俺がラゼスさんの」

「奥さんになって欲しいということだ。幸い、ラゼスさんはマキトには好意を抱いているからな」

「そうそう。マキトがこの村に初めて来た時、甲斐甲斐しく世話を焼いていて驚いた」

「俺も賛成」

口々に言うものだから、ラゼスさんは、耳を真つ赤にさせて俯いてしまった。

「騎士と王女は婚姻出来ない？ラゼスさんは、王女が好きとかは？」

「悪いが、守る対象であつて、恋愛対象ではない」

自分が王女の夫になる気もなく、愛人になる気もないとキツパリとこの時だけは

ラゼスは自分の言葉で皆に伝えた。

「だよ。王女と婚姻は玉の輿にはならない。今までの生活をそのまま維持するには

余程の高位貴族でないと叶えられないし、愛人はきついよな」

マキトがまるで知っているような口ぶりで話すものだから、男達は聞いているうちに大笑いだ。

そうしてその当日がやって来た。

辺境の場所に、王家の馬車が3両と50人近い侍女と護衛、騎兵隊が到着した。

村長宅の敷地内に降り立ったのは、王と第一王子、第二王子、第一王女、第二王女の五人。

王妃や側室、まだ幼い第三王子は王都で留守番となった。

その数時間前。

マキトから協力を得たラゼスは、半年ぶりに髪を整え、髭を剃った。

ラゼス夫人

「誰ですか？」

妻役を引き受けたマキトは、ストーカー被害に遭った高校時代のイケメン友人を思い出した。
あの時の友人の苦悩を知っているだけに
なんとかラゼスを助けたい気持ちが強かった。

女の子って、自分の良いように解釈してこっちの意見を聞いてないからな。

告白を断わっても断っても着いてくるし、知らない間に恋人として振る舞っている。

周囲にも付き合っていると勝手に宣言して、断わった本人を驚かせる。

他の女の子と会話するだけで勝手に嫉妬して、ただ話をしただけの女の子に嫌がらせをする。

ラゼスが話したいくつかは、友人と似たような話で、マキトは憤慨した。

「陛下の耳にまで入った時は、俺はもうこの国にいられないとまで思った。

だが、以前から王子には相談していたので、大事にならずに済んだ」

「今回王子はなんて？」

「年1回の儀式で、第2王女を外していたが、第1王女が妹姫の味方で阻止されたそうだ」

「……。ところで、ラゼスさんて。王女を妻に娶るくらいの家柄？」

「微妙だな。一応貴族だが」
あえて彼は爵位は誤魔化した。

「でも、王子に相談出来るってことは」

「王子とは幼馴染。王子が3つ下で、俺は幼少の頃からよく一緒にいた」

「もしかして、その狩りがきっかけではなくて、前から？」

ラゼスは、一瞬黙った。

「前から兄のように慕ってくれていたが、行動に出したのは狩りの日からだ」

「ラゼスさんは、王女を娶る気は」

「先ほど言っているように、ない。マキトが言ったように、彼女に今のような生活を持続

させる力はないし、そもそも恋愛対象でない」

「王子の妹だよ。少しも？」

「ああ。どんなに望まれても好きでもない女性をどうしても受け入れられない」

「でも、王が言えば……。政略結婚だって」

マキトが疑問に思ったことを口にする、ラゼスは苦笑した。

「まあ、そういう結婚も世の中にはある。俺の家にはそのような結婚は

上手くないかないということ代々していない」

「へえ、そうなんだ」

「それで、マキトは引き受けてくれるか？」

じつとラゼスに見つめられて、ふっと息を吐いて。

「分かった。引き受ける」

内心、こんな熊みたいな男のどこが気に入ったんだろっと思いつながら、

マキトは了承した。

人妻としての証として、男性側から男性の家の物を身につける風習がある。

妻である証として、話を引き受けた夜にラゼスの家の紋章が入った腕輪を受け取った。

それを手首にすると、ラゼスは妙にソワソワしていた。

そして、王族到着する当日の朝。

朝食をいつも通り、宿舎で準備し、皆がそれぞれやって来て、食事を始めた頃。

ガコツと音を立てドアを開けて入ってきた人物に、全員が冒頭の言葉を思い浮かべた。

「誰ですか？」

実際に口にしたのは、マキト。

入ってきた人物は、物凄い渋い感じのイケメンで、誰もが驚いていた。

「もしかして、ラゼスさん？」

「ええっ、それが本当の顔？」

20代の若い警備隊員達に言われて、ラゼスは苦笑。

モサモサだった髪形は、村の床屋で綺麗に刈られ、口髭も全部剃っている。

確かに青年の顔。しかも爽やかな好青年姿。

「うわ、若かったんだねラゼスさん。俺、てっきりバンハトさんと同じ歳かと思ってたよ。

夫婦役を言われた時、えらく年齢差があって大丈夫かなあと思ってた」

マキトが素直に感想を言うと、場は大爆笑。

「半年前は、口髭は確かにあったが、今回はスッキリさせたせいで、これはまた若く見える」

バンハトも苦笑している。

「はいはい。笑うのはそこまで。俺の面倒な頼みに協力有難う。

王族が帰るまでは、よろしく頼みます」

ラゼスが頭を下げると、皆が頷いた。

「では、練習」

ラゼスの胸へ目掛けて、ターラントに背を押され

マキトは抱きついてしまった。

「ラゼス夫人、しっかり頼みますよ」

「ラゼス夫人か」

「マキトの呼び名は、村長とも統一した呼び名を決めている。ラゼス夫人だ」

「ラゼス夫人だな、よし」

しかも、ノリノリだ。

大丈夫なんだろうかと、疑問が沸くが、村長にも村民にも話が伝わっているとのことである。なんとかなるかなとも思う。

だが、この時。

俺は、村民に話しが行き渡っていたことで、後日悩まされることになる。

その数時間後、王族達と護衛の団体の到着が、村の者の知らせで伝えられた。

視線は胸ですか

1か月の間。村の中を歩いて、いろいろな村民と話をしたり料理や洗濯の方法を習ったりして、村を観察してきた。

俺は外見可愛い女の子だが、中身は所詮18歳の男だ。奥さんとか子供と会話しながら、気付くことは多々ある。それも男側からの視線だ。

あ、この奥さんは昔美人だったとか、この女性は仕草が可愛いなあとか。

子供がこれだけ可愛いと母親もと思えば、父親だったり。胸に関しては、過酷な土地のせいなのか、桃サイズかりんごサイズが多いな。

大きいなと思う女性も数人いる。

俺と同じか、もう少し大きなサイズ。

そんな女性に恨まれそうな事を考えていると、しゃがみこんで洗濯をしていたせいで、背後から幼児に抱きつかれた。

歳は5歳の男の子で、マスクメロンサイズが気になるらしい。

後ろから追ってきた母親に引きはがされ、俺は何度か謝られた。

「すみません。息子が失礼なことを」

「まあ子供のやることですから」

そう返しながらも、男は興味あるだろうなと思いつつ、その幼児の頭を撫でた。

今日は、王族の恒例の女神への儀式。

洗濯している理由は、王族が恒例行事を行うにしても、村民には関係がなかったことだ。

王族が繁栄と感謝を女神に伝える儀式とかで、王族と上の家臣達くらしいか内容は知らない。

その儀式を行っている最中、護衛は見張り。

儀式が行われるのは、女神の森の中にある湖の真ん中にある陸地。簡易渡し船が村にあり、それを湖の周辺で組み立て

王族のみが陸地の中にある洞穴に入り、なにやらするのだそう。

聞いた話では、洞穴は昔女神が滞在していた時の住居跡で、今は何も無い。

ラゼスさんも他の警備隊の騎士達も周辺の警備にあたっている。村の者や妻子は関係がないので、通常通りの生活を送っている。

大変なのは、宿泊施設を任されている家族や手伝い人達。

王族と50人（侍女と護衛）の食事とお世話を2日することになっている。

侍女長らしき女性がテキパキと指示を出すので、大わらわだ。

ラゼスの妻がそれに参加しないのは、宿舎での仕事をしているからとの配慮からだ。

お昼には戻るとのこと、野菜たっぷりチキンスープ。

燻製ハムらしきものと野菜を挟んだロールパンのサンドイッチ。

それらをいつでも出せるように、警備隊員の5人分と自分の分をテーブルにお皿とスプーン、

フォークの準備を済ませて、洗濯を干していた。

共同で使用する部屋もあらかた片付いたところで、数人の足音と疲れた感じの会話が聞こえてきた。家の前にある井戸で水をくみ始めて、手を洗う男達の姿を確認すると、

慌てて食堂へ移動した。

大鍋の下にあるかまどに炭を足し、火力を上げると、スープをおたまで掻きまわす。

ガチャガチャ音がする胸当て等を外しながら、装備を解いて食堂へ男達が入ってきた。

「ただいま、夫人」

早速、笑顔でロツサがマキトに声を掛けてくる。

夫人と呼ばれ、一瞬誰の事かと思ったマキトは、ハッと目を瞠り忘れかけていた妻役を思い出し

「お疲れ様でした」

と、笑顔で夫人になり切った。

「ほお、そなたがユーシイの奥方か」

そこへロツサを追い抜いて、前に出て来た男性

ショートヘアの金髪、茶目の若い青年に声を掛けられ、驚いて怯む。その男性の後方から出て来たラゼスが苦笑しながら、マキトの隣に素早く移った。

「ええ、妻のマキトです。この村で倒れていたところを助け、意気投合し妻に迎えました」

そう物静かな感じの声で説明し、左手首に付けている妻の証を金髪の青年に見せた。

「なるほど。ラゼス家の紋章の。お前が落ち着いたこと安心したよ。じゃじゃ馬が迷惑を掛けた事許してくれ」

「いえ、殿下。もうその話は」
「お前が既婚者になれば、アレも手出し出来ぬだろう。そろそろ戻らぬか」

話が自分を通りこして先に行っている話のような気がして、マキトは隣りのラゼスへ視線を向けた。

その不安を読み取ったのか、ラゼスはマキトの左腰へ手を回し自分の側へ引き寄せる。

「心配するな」
小さな声が掠る。

いやいや、心配ではなく。
このキラキラオーラの方が誰なのかが知りたい。

金髪の若い青年は、ほおと声を洩らしてニッコリ。

「そろそろ私を紹介してくれぬか」

その言葉にラゼスは頭を下げ、

「マキト。この国の第1王子クルス様だ」

と、王子を軽く紹介してくれたもので、驚いたマキトは慌てて貴婦人らしいお辞儀（ラゼスから簡単に教わっていた）をすると、

「よい」と返事が返ってきた。

「こちらで、ユーシィの奥方の手作りの食事が取りたくてな。」

王子の後ろで控えていた警備隊員達は、恐縮してしまっていた。普段がのんびりで穏やかな人間も王族のオーラには、歯が立たないようだ。

どうやら突撃訪問されたようだ。

やはり王族と食事は庶民的にはきついだろうと考えたマキトは、積もる話もあるだろうからと

ラゼスの部屋で食事を取るよう薦め、他の4人に感謝された。

2人分の食事をラゼスの部屋へ運び、皆で寛いで食堂で食事を取る。

「はあ、王子殿下と一緒にのテーブルにつくには、心臓が持たないですね」

「雲の上の方ですからね」

そんな愚痴を零しながらも、王族達が明日の朝には出立することで警備としてどこまで着いて行くのかを相談している。

42

「確か、領主の隊が隣り町で待機していると聞いている。」

「そこまで見送るのか」

「久しぶりに町まで行くなら、ラゼス夫人。何か買ってきて欲しいものとかないか」

「大きな町？」

「いやいや。この辺りではいろいろ買えるというだけで。王都やその周辺と比べたら」

小さな町と言ったところでしょうな」

「一緒に行つてはダメかなあ。ちよつと他の場所も行つてみたいなあ」

俺は、村しか知らない。だから、他の町とか行ってみたい。

「ついでに王都まで来てはどうだ？」

背後から声がして、食後のお茶を飲んでいたそれぞれが零した。口から嘔き出したのは、ロツサだ。

「殿下」

ラゼスが窘めると、王子は苦笑している。

「ラゼス夫人。どこの国の者かは知らぬが、食事は実に美味しかった。」

我が城でも料理長に伝授して欲しいものだ」

そう言いながら、座っているマキトを上から眺めてしまったことで、王子は顔を赤くさせ、いつになく怯んだ。

「夫人・・・」

どうやら、上からマキトを見たことで、メロンの谷間をすっかり見ってしまったようだ。

立ち直った王子は、ラゼスを羨ましそうに見た。

「ラゼス。妻にした気持ち分かるぞ。上手くやって羨ましいぞ」

「殿下、どこ見てるんですか」

殿下は真面目な方で、問われたことに素直に指で指し示した。

胸ですか。そうですね。

王女 登場

女神への儀式も済み、昼食と休息が終わったところで全ての従者達が明日の朝の出立に向けて準備を始めた。

「大所帯だから、来るのも大変、帰りも大変だな」

「王都から距離としてはどのくらいのものなんですか？」
支度をしている騎士達を見ながら、詰所へ入るラゼスは暇になったからと遊びに来た村長から質問を受けた。

「普通にここまで馬で単独なら、丸3日かな」

この村の者は、村から外には中々出たがらない。

村長も妻も出たことがない。

どちらかというと、外からこちらへ来る率の方が高い。

辺境の地とはいえ、住んでみればそれなりで。

贅沢を好まなければ、天候、食物、生き物に対しては、女神の恩恵がある地だ。

辺境と呼ばれるのは、山を1つ越すことにあるだろう。

「あのくらいの規模なら、5日で戻るだろう」

「は、よく来る気になりますね。そんな長旅を重要人物を運びながら。」

警備はあんなに少数で大丈夫なんですかね」

「ああ、それなら大丈夫。何故かこの儀式については、昔から守られているんだ」

「守られている？」

「そ。女神の為に祈りにくるといふことだから。どうも女神の加護があるらしい」

「そうなんですか？」

「俺も殿下から聞いたからの話だが。何でもこの日に来てくれたら大丈夫とお告げがあるらしい」

「あ、もしかして巫女に？」

「ああ。不思議だよな」

「不思議ですねえ」

そんな村長とラゼスの会話の前に、ひとり女性が詰所へやって来た。

「すみません。第2王女リーシェ様付きの侍女 サリアと申します。こちらにユーシィ・ラゼス様がいらしているとお聞きしておりますが」

女性が頭を下げる。

「ああ、俺の事だが」

ラゼスは村長にマキトを呼んでくれるように頼んで、侍女へ向き合った。

侍女は丁寧に頭を下げた。

「ラゼス様お久しぶりです。姫様より夕食にお招きしたいと、言付かっています」

「それは、妻と一緒にでも？」

「・・・聞いておりませんので、再度お伺いして参ります」

侍女は頭を下げ一礼すると、直ぐに踵を返し去った。

その後ろ姿を見送ると、同時に村長がマキトを連れてやって来た。

「どうでした？」

村長が心配そうだ。

ラゼスは、ふうと息を吐いて村長に相槌を打ち、マキトに視線を向け。

「今夜が勝負だ」

真剣な目にマキトも頷いた。

ラゼスは、詰所をベルダと交代すると、急いで王子クルスの元へ走った。

村長は自宅へ、マキトは夕食作りの為宿舎へ戻る。

その後、話は夕食を作っていたマキトのもとへロツサから聞かされる。

ロツサは、王子から渡されてきたという箱をマキトへ渡すと

王子付きの侍女2人を紹介してきた。

「こちらの2人は、王子付き侍女の方々。ラゼスさんからの要請で、手伝いにきてくれたそうです」

「初めまして、ラゼス夫人。ラミナです」

「お手伝いに参りました。メイアです。よろしくお願ひします」

一礼する2人に、マキトは初めて侍女という存在を見て驚いた。

「え？王子付きの侍女？」

（うわゝ、王族関連の人達ゝ）

「夕食は、ラゼスさんと夫人は、王女達と取ることになってる。

ラゼスさんは先に王族のいる村長の家へ行っていると言っていた。準備があるからと。」

夫人は支度が出来たら、バンハトさんが付き添ってくれる話になる」

淡々と思い出しながらロツサが説明すると、侍女のメイアが付け加えた。

「バンハト様は、食堂でお待ちになると聞いています」

「え、そうなんだ」

(侍女、仕事早い)

「食事の方は、私達が引き継いでおきますので、大丈夫です」

支度する手伝いを王子から任されてきたと侍女が2人笑顔で答える。

「早く支度に掛かりましょう」

「王女を待たせると、また何を言い出すか分かりません。お早く」

「分かった」

侍女の1人ラミナは、夕食の支度を引き継ぎ、もう1人メイアは着替えと髪形を担当すると言い

マキトはメイアと部屋へ戻ることになった。

早速部屋で箱を空けると、ラゼスが王子に頼んでいたドレスと髪飾り等の装飾品がいくつか入っていた。

「凄いドレス」

まさか自分が着ることになるとは思わなかったが、今の姿なら似合うだろう。

「クリーム色の髪に、ドレスの色が似合いますわ」

「そ、そうなんだ」

侍女は真っ白なドレスを見つめ、広げるとマキトへ着せはじめた。

生地は胸元部分がかかりきつく、侍女はそのメロンにあくせくする。

「い、痛い」

「我慢です」

ビリ。

谷間部分に裂け目が出来、メイアは慌てて針と糸で補正し、それを隠す為に

アクセサリーを縫い付けた。

「うう、なんて胸なんですか。羨ましい」

「すみません」

何事もなかったように仕上げが終わり

髪形も可愛く結いあげ、髪や首回りにアクセサリーを付けると、ふんわり系の可愛らしいお姫様の出来上がりだ。

「まあ、可愛い」

侍女は癒し系美女になったマキトを褒めまくった。

「さあ、皆さまにも報告して、村長宅へ行きましょう」

「あ、ああ」

侍女のペースに乗せられて、マキトは食堂で待機しているバンハトを呼びに行こうと

ドアを開けたら、マキトのドレス姿を見ようと待っていたロッサ達4人は言葉を失って出迎えてくれた。

「あ、ちょっと王女に会いに行つてきます。バンハトさん、付き添いお願いします」

軽くマキトが声を掛けたつもりだったのだが、

「な、夫人？マキトなのか？どこの姫様かと思った」

「俺も」

「元々美人だとは思つたが、これほどとはなあ」

「皆さん、俺が何の為に行くのか分かってますよね？」

「分かってる、分かってる」

「はははは、まあ、ラゼスさんもいることだし、頑張ってる」

「それにしても姫様としてやっていけそうだな」

(着飾ったことを褒められても・・・男としてどうよ)

感心しまくりで、マキトの微妙で複雑な男の心境は、気付かれることはなかった。

「行ってきます」

「がんばれ」

「行ってらっしゃいませ」

警備隊の4人と侍女達に見送られ

食堂から出口へ向かい、詰所の横を通り、大通りに出る。

そこから村長宅までは徒歩5分と掛からない。

普通は夫人は家まで歩くということはないが、マキトは馬車を使うほどの距離ではないと

判断し、バンハトと王女がどんな作戦でくるのか対策を話しながら歩いた。

着いた先、村長宅の敷地内では、あちこちで護衛や従者達の宴会が始まっていた

大変な賑わいだ。

そこを通り抜けると、王族を護衛している騎士達が両脇に立ち、こちらの名前を名乗ると、侍女を呼んでくれた。

「ラゼス夫人、ようこそ。私がお部屋まで案内致します」

美人な侍女が一礼し、マキトとバンハトを誘導し、案内した部屋の扉を開けた。

「どうぞ。こちらでお待ち下さい」

「有難う」

マキトが部屋に入ると、バンハトは扉の前で待つよう侍女に指示され、扉は閉まった。

バタン。

（あれ？夕食に招待されたはず。ラゼスさんも誰もいない？）

部屋の中は真ん中にテーブル、テーブルの上にはローソクが灯っている。

椅子が対になっていて2客。

（おかしい）

ガタン。

背後の扉が開き、振り向くと可愛らしい着飾った少女が入ってきた。様子から貴族か王族か。

「あの、どなたでしょうか？」

疑問を口にする、少女はくすくすと笑いながらマキトの横を通り過ぎた。

テーブルの前に立ち、窓側の方向に向いている椅子に座った。

「私は夕食に、貴女を招待した覚えはないですわ」

もしかしなくても、王女？

驚くマキトに、彼女は口元を綻ばせ。

「私は妹の為、貴女を誘拐しに参りましたの」

拉致されてみました

何の能力もない俺が、逃げ切れるわけがない。

王女が隠し持っていたと思われる小さなベルがチリンと3度鳴らされる

マキトの背後の扉が大きく音を立てて開き、

騎士が8人程部屋に雪崩れ込んできた。

バンハトさんは騎士達に拘束されていて

俺は槍を目の前に突き付けられた。

「無駄な抵抗は、怪我の元よ」

王女は、勝ち誇ってドヤ顔を見せる。

その姿に怒気を発したものの、ここは拉致られて様子を見た方がいいのか

悩んだ。

何しろ、幼少から大学進学前まで習ってきた合気道が役に立つかどうかも分からない。

剣道は高校の体育の授業で少し習ったくらい

空手に至っては、小学5、6年の期間だけ。

騎士という職業の方々にとても勝つとも思えない。

「さあ、夫人。どうぞ我々と」

騎士の中の上司らしき人物が騎士達を従え、一歩前に出てマキトの前に手を差し出す。

この手を取って、言うことを聞けということだろう。

「どこへ連れて行かれるのかな」

「そなたが知らない場所よ」

「どうしてと伺っても？」

マキトの挑発に、王女は乗った。

「そなたが邪魔だからよ」

「邪魔・・ね。婚姻していても邪魔だと言われる理由が知りたいな」
マキトの言葉に、王女は眉間にしわを寄せた。

「そもそも。貴女が横から攫うような事をしなければ問題なかったのよ。」

貴女は、ユーシィお兄様がお父様の弟と知っているの？」

爆弾発言だ。

「王弟ということか？」

「そうよ。歳が随分離れているのは、お父様が22歳の王太子時代に、

お爺様の2番目の若い側室に子供が生まれたの。それがユーシィお兄様。

その3年後にお父様の妻である王太子妃に一番上のお兄様が生まれたから。

私達からは叔父にあたるわ。」

大きいため息を吐きながら、マキトを見つめる。

マキトの頭の中には、叔父さんに恋する姪の図が浮かぶ。

「そうなんだ」

妹の恋を応援する姉は恐ろしかった。

「そう、それでユーシィ・ラゼスは、妻を誘拐した犯人を捜し出すとは考えないの？」

マキトが応戦しても、彼女はクスクスと笑う。
「傷心のユーシィお兄様をリーシェがお慰め出来るわ」

ハッピーエンドの結末を思い浮かべてうっとりとする王女に、
マキトは頭を掻きながらため息を吐いた。

「あのさ、そういう展開は稀なことだと思っよ。
普通恋愛で婚姻した場合、誘拐されたのなら見つかるまで探すことに没頭するだろうし

犯人があんただと分かれば、縁を切られるとか思わないか？」

「え？」

キョトンとする王女が人形のように、マキトは苦笑した。

「本当に箱入り娘なんだな。世間をよく知らないって感じた。世の中、物語のようにはいかないって分らないのかなあ」

マキトの前で手を差し出している騎士に向き合つと

「あんたは大丈夫なのか？いくら主の任務とはいえ王子の幼馴染の騎士の妻の誘拐の共犯で。

あ、王弟になるのかな？騎士としては、どうよ？

王に反逆の意志ありと思わせないか？

王子が犯人捜しをしたとして、あんたやそこにいるあんたの部下が
犯罪を犯したとして
裁かれないのか？」

マキトの話に、手を差し出した騎士は手を引き明らかな戸惑いを見せる。

周囲で控えている騎士達は、同じく動揺を見せている。

「ちょっと、私達の覇気を失くすような話しないでくれないかしら」
せつかく妹姫の為の誘拐する計画が無くなってしまつと、あからさ

まに王女が怒りだす。

「そうか？お・れじゃない。私は事実を述べただけ。王女、あんなのせいで

こいつらは職を失う・・・いや裁かれることになった場合、どう責任をとるつもりだ。

臣下を破滅させるのが主である王女のやることか？」

マキトのお小言は止まらない。

「うっ・・・」

怯む王女に体ごと向き直り、片手は腰に、もう片方は人差し指を立てお説教モードに入る。

「そもそも。当人同士の恋に何故外野である貴女が入って来るのか理解出来ないよ」

「何故？妹の幸せを願う姉がいて、何が悪いというのよ」

「ああ、そうなんだ。それなら相手については？相手があんたの妹を選ばなかったら？」

「・・・、そ、そんなことは」

「ユーシイは、断わったはずだ。だから、ここにいるのじゃなかったか？」

止めの一言に、ついに王女は黙ってしまった。

「・・・」

「反対に聞くが、もしもあんなの婚約者に、他の国の王女が略奪婚を狙ったら、どうするんだ？」

しかもその王女の姉があんたが邪魔だから誘拐したら？」

「え・・・」

自分に置き換えてと話を始めると、王女は今までの女王ぶりはどこに行っただのか

蒼白になっていく。

控えていた騎士達も覇気がない。

「なあ、そんなに誘拐したいのなら、ユーシィ・ラゼスがどうするか見てみる気はあるか？」

「どうということかしら」

「あなたが実際、私を誘拐した場合、あいつがどうするかをその目で見てみたらどうだ？」

「目で？」

「お・れ・いや・、私はどこぞの部屋で休むことにするから。

夕食に来なかつた妻の為に、夫がどうするのか、貴女の目で確かめて欲しい。

貴女がすること、どういうことになるのかを」

踵を返すと、先ほどの騎士と目が合い、こちらから手を差し出すと、彼は躊躇する。

「姫様」

彼は自分の主に、指示を求める。

王女自身も戸惑い、目を彷徨わせている。

「そなたは凄いな。理論的でありながら、正論。相手を戸惑わせる眼力と言動。

私の負けよ。私が婚約者に、妹のような存在と私のような姉がいたら恐ろしいと思う。

そなたの言葉で、私は目が覚めた。

そなたの言うように、ユーシィお兄様がどのような行動に出るか見てみたいと思うわ。

私に協力をしてくれるというの？ラゼス夫人」

この時、名を呼んだことで、王女は初めて、マキトをラゼスの妻と認めた。

マキトは、微笑んだ。

「ああ。誰も咎められることのないように私が計画を立てよう」

そうすると、マキトは王女と騎士達に先ほど浮かんだ計画を説明すると

突拍子もない話に皆が顔を見合わせた。

「本当にやるのか？」

「ああ、ちよつと本心を試したいからな。私にはいろいろと隠し事をされているからね」

「ラゼス夫人。そなた凄すぎる。私はそなたを相談役にしたい」

「ははは、相談役ではなく、友人なら大歓迎」

何気ないマキトの言葉に、王女は目を見張る。

癒し系美人な顔のマキトに、すっかり絆されて頬を染めた。

「そう、友人。いい響きだわ」

「そうだろ？」

そうしてマキトは、初めて拉致されました。

R15以上な事は遠慮します。

認識が甘かったと言えよう。

しかも準備が万全でなかった。

突然思いついた計画だったから、アバウトだったことは認めよう。

だが、仕事速すぎだ。

俺は、確かに第1王女アリシヤと対峙し、王弟だという事実を隠して俺に妻役をさせたラゼスさんをギャフンと言わせたくていたずらしてやろうと計画を考えた。

王女をなんとか上手く説得し、誘拐されて慌てふためくラゼスさんを見てみたいと思った。

だからこそ、王女を誘い実行してみたら

いつの間にかバンハトさんがいなかったことに失念していた。

一体、いつのまにと思って、当時の担当していた騎士に聞けば拘束されていたはずのバンハトさんは、覇気を失って俺の説教を聞かされている時に逃がしてしまっただと。

そういうことは早く伝えようよ。

幽閉する予定だったという川沿いの倉庫に着いて簡易夕食を

一緒に着いてきた騎士2人と食べていたところを

ラゼスさんとバンハトさん、村の警備隊の皆に見えられた。

食事をしていなかったから、扉が開いた拍子に、3人で飛び上がって驚い

た。

「大丈夫か、マキト」

蝋燭3本の薄暗い中をラゼスは入って来たかと思うと、俺をを自分の胸へ抱き寄せた。

「ラ、ラゼスさん・・・」

頭をしっかり彼の手で固定されて、身動きが取れない。

体に回されたもう片方の手が腰に回っていて、胸にあたっている。

「えっと、俺もごめん」

「ああ」

ゆっくり確かめるように手が動き回るので、くすぐったくて

俺は身じろいだ。

「バンハトさんから、全て聞いている」

その一言で、俺は片手で顔を覆い、しまったあとという顔になった。一緒にいた騎士達は、ラゼスさんの本当の爵位を知っているので、既に端に寄り敬礼を行った。

「黙っていて、済まない。アリシヤから俺の事を聞いたと思うが、詳しく説明していなかった為に、姪が迷惑を掛けた。マキトに危害を加えようとしたと聞いて、心配した。

しかも姪に協力を申し出て、同じ立場だったらと、傷みを教えようとしてくれたことにも感謝する」
本当に全て知っていたこと、バンハトさんが機転（本当は、ラゼスさんをギャフンとさせたかったことを伏せて話していたこと）を利かせていたことに気付いた。

「アリシヤ姫をお咎めなしにしてくれるだろ？」

俺が頼りない顔で見上げると、彼は苦笑した。

「君が望むように善処しよう。と、言いたいところだが父親である王に任せた。」

本来は牢に入れるなど罰しなくてはいけないところを、姪は君に救われた形になる」

ラゼスは、肩を竦めた。考えを見透かされて俺は笑うしかない。

「はは、お見通しだ」

「有難う。王からも礼を言われた」

「そっか。まあ、隠れていたところを見つかるのは早かったけど、良かった」

「あ、全くのお咎めなしではないよ。未遂だったのだから、それなりにお仕置きはある。」

王がアリシヤには、1か月座敷牢と言われる幽閉部屋行きを命じた」

「え？幽閉？」

「まあ、誰も訪れない部屋で1か月謹慎というところだ」

「俺は？」

「マキトは、何も」

「アリシヤ姫の騎士は？」

ラゼスが振り返ったことで、アリシヤ付きの騎士達が狼狽える。

ラゼスは、その様子をそつと窺いながら

「ああ、近衛騎士の君達は主であるアリシヤに逆らえなかったという話なので、

1か月騎兵隊のザス將軍のところ鍛えてもらえるそうだ」

「ええっ」

「あの將軍に？」

その慌て振りから、きつと凄じ將軍の元へ送られるんだと察した。ワタワタしている騎士達は、可愛らしかった。

クスクス笑っていると、近衛の騎士達が泣き言を言う。

「夫人。我々は騎士達の中でも有名な、鬼將軍に絞られるということですよ」

「え？鍛えてもらっては、そういうことなんだ」

「はい」

ラゼスは、共犯したことでお咎めがないとでも？と言いたそうな顔だ。

「アリシヤにも問質している。さあ、もうこの未遂事件は終わりだ。宿舎へ戻ろう」

「え？今更だけど、王様との夕食は良かった？」

「ああ、お開きだ。誘拐未遂が起きたんだ。王も断念した。」

明日の出立で見送りの時に挨拶をすればいいということになった」

「そうか。緊張していたけど、それはそれで良かった。」

いろいろボロが出ることを恐れてたからな」

近衛の騎士達は意味が分からなかったようだが、警備隊の皆は意味が分かって苦笑している。

村内では乗らないというユニコーンのような馬でのお迎えに感動してし

早速ラゼスが連れて来た馬の乗りこむ。

警備隊の皆は、それぞれ馬に乗り、跨ったばかりのマキトの周囲に集まり歓迎してくれる。

「マキト良かったな」

「心配したぞ」

皆に声を掛けられ、マキトは申し訳なくなった。

ラゼスの合図で川沿いをゆっくりと歩き始める。

馬のカツポカツポという蹄の音をバツクに、暗闇を見つめながらマキトは

自分自身にも責があるのではと思う。

「ごめん。却って心配かけてしまったんだな」

「はは、まあな。でも、アリシヤは俺の言葉や行動に驚いていた。ラゼス夫人が言った通りだったと

零していた。あいつは、反省している」

苦笑気味のラゼスに、マキトはほっとしたものの。

「そついえば、肝心な原因の第2王女の方は？」

姉のアリシヤが俺を誘拐しようとしてまで企てたのだから、妹のリーシエはどうなったのか？

「第2王女か。彼女がどう考えているかは、まだ分からない。ただ、俺が来ても沈黙していたし、姉が起こした事にも何も横やりはなかった。

先にマキトの救出しか頭になかったから、俺に何か言ってきたかもしれないが

聞かれたのか、言われたことも分からない。」

背後に控えていたバンハトも頷いた。

「俺は、急いでラゼスさんの居場所を聞きだし、報告することしか頭になかった。

王女に関しては、何もなかったと思う」

他の騎士に詰所へ連絡してもらい、ベルダからターラント、ロツサへ連絡が伝わり

落ち合って来たという話。

「仕事速いですね。」

「マキト。俺達はいざという時はやる男だ」

「そうそう」

ロツサとベルダが明るく答える。

「そうみたいだね。有難うございます」

「いえいえ」

「なんの」

ラゼスを始め5人の馬は、宿舎へ向かった。
流血沙汰にもならなく、この事件は幕を閉じた。

これは恋愛になるのか、ならないのか

その日の夜。

どうしても心配だから、部屋の中でソファで寝るからとラゼスは俺の部屋に入ってきた。

「護衛だから、家具の1つとでも思ってくれ」

「・・・毛布1枚は寒くないですか？」

ラゼスの部屋は、隣だ。

だからもう1枚羽織ったらどうかと提案するが、引かない。熟睡したくないからと拘る。

「仕事している時は、毛布すらない時もある」

「そうですか」

宿舎内の一室で揉めていたが、王族の団体が帰る明日1日までの話だからと俺は折れた。

「分かりました。風邪を引かないで下さい」

そうして、3日前から使用している宿舎でも一般的なベッドに潜り込んで、横になった。

だが、眠れない。

ここ2日ばかりは、いろいろな事があり過ぎて体が、心が興奮している証拠かも。

俺は何度も寝返りを打つ。

その度に、彼もこちらが気になっている気配を感じる。

この時点で、このままでは絶対に2人とも睡眠不足になるのは決定していた。

ムクリと起き上がると、彼もソファから体を起こす。

「どうした」

「……、ラゼスさんは、眠れますか？」

「俺は仮眠程度でいい。」

「……」

そういえば、TVでもドラマに出てくる護衛とかは仮眠だったな。そんなことを思い出していると、ラゼスはベッド近くまで来てくれた。

「眠れないのか？」

ベッド脇に腰を降ろしたことで、彼が物凄く身近に感じる。

月の明かりしかない薄暗い部屋で見る男は、いつもボサボサ頭の髭モサモサの山男ではない。

落ち着いているから、面白い男でもない。どちらかといえば、寡黙タイプ。

顔は、髪形を変え、髭を全て剃ったことで、渋い感じがするが爽やかなイケメンの部類だ。

騎士かと思えば、王弟という位の高い身分。

女性なら玉の輿だ。

自分が元男だったことを忘れてしまっくらい羨ましい男。

見れば見るほど、自分の頭の中の思考が女性寄りに傾いていることが分かる。

自分の両親の顔やどんなところに住んでいたのか、最近はずぐに思い出せないくらいだ。

このまま全て忘れていくのだろうか？

彼の事を考えると、過去がどんどん分からなくなる。

この目の前の男に好意を寄せている自分は、本当におかしいのかも

しない。

「不安なのか？」

今までの過去や出自を聞かれたこともない。

俺が自分から話すまでは、待っていてくれているのかもしれないな。そんな事を考えていると、男の親指が頬を触れて離れて行く。

思わずその手首を反射的に掴むと

その指に水滴が伺えて、いつの間にか涙が出て指で拭ってくれたことを知る。

「すみません」

ふと浮かぶ謝罪を口にする、掴んでいた手が俺から離れ、逆に手を握られる。

「いや。まだこの村へ来て、1か月程しか経っていない。

マキトの事も自然に受け入れているものの、マキトの家の事情も聞かずに済まないと思っている。

急に俺の個人的都合で嫌な事も引き受けてくれて」

女性に甘く囁くくさいセリフだなと苦笑してしまう。

そんな事を言う若者は、現代に何人いるだろうか。

「あ、ああ。それは別に。気にしないで下さい」

謙虚な可愛い女性に見えたのかもしれない。

俺は、自分の理想を実体化した癒し系のフワフワ髪の女性だ。引き寄せられ抱き込まれたかと思ったら、

そのまま仰向けに態勢が移り、体が後方に倒れて行く間彼の顔を見ながら、

ベッドへ押し倒されていた。

俺の中で何かが終わってしまったような気がした。

コッコー。

鶏のような鳥の朝を知らせる鳴き声で、いつものように目が覚めた。いつもと違うのは、隣りで熟睡している存在。仮眠程度と言っていた割には、疲れていた様子だ。

「こんなところ襲撃されたら、終わりかな」

上半身を起こすと、隣りで寝ていた男はククツと笑った。

「本当にな。俺としたことが、よく眠れた」

頭を掻きながら起き上がる彼は、鍛えられた筋肉といくつかの傷が見え隠れしている。

「そろそろ皆さんも起きてくる頃かな。支度しないと。」

まだ全てが女性でないので、俺は裸体を惜しげもなく見せつつベッドから降りるので

ラゼスは「慎みを持ってくれ」と直ぐ近くに落ちていたタオルを俺に手渡してくれる。

「え、ああ。そうか、服着てなかった。」

俺も最近では羞恥心が芽生えてきているので、クローゼットからいつ

もの服を取り出すと
頭から被る。途中、メロンでつつかえるが、潰すように押し上げて
なんとか。

その様子をラゼスは茫然と見ていた。

「確かに大きくて柔らかいと思うが、そんなにつかえるものなんだ
な」

何気にセクハラ発言。

「ははは」

乾いた笑いが出る。

「そういえば、贈ったドレスも胸辺りには何もなかったシンプルな
ものを選んだはずが、
何かつけていたな」

「あ、そういえば。すみません。昨日、せっかく頂いたドレスの胸
部分が破れてしまっって、

侍女さんが補正してくれて・・・それを隠す為に装飾を付けてまし
た。

大きくてすみません」

頭を下げる。

「・・・・・・・・」

セクハラ発言をされたこともあり、逆セクハラ発言をすると

彼の視線が胸に行きつき、昨夜の事を思いだして顔や耳を赤らめた。
彼の言った、ドレスの胸元の事も大きくて柔らかい感触の話も全て
実体験済だからこそその感想で

言った言葉を俺に返されて、恥ずかしくなったようだ。

まるで恋人のようだな。
くすくすとお互い笑い合っ
て、お互い直ぐに我に返る。

「朝食の支度」

「見送り」

起きたのが早かったこともあり、どちらも時間になんとか間に合う
ことが出来た。

ただ、朝食時の食堂はいつもよりも遥かに静かな雰囲気
でラゼスが言うところでは、皆の視線が痛かったそうだ。

これが恋愛といえるのか、まだマキトは自分の事情を考えると素直
に受け入れられない。

略奪宣言

昨日は流されてしまったが、男なら普通はそうなるよな。

据え膳だし、男ならフラつとくるよな

俺だって、男なら間違いなく。

理想なマスクメロンな女性に、誘われたとか思うようなシチュエーションだった。

女性側からは、俺ってどうなんだろ。

自分で自分を自答し、正当化しようと頭が働く。

そもそもこの世界の貞操観念は、どうなってるかな。

俺の行動は、間違っているのか誰かに聞いてもらわないと

一歩間違えたら娼婦と同じに見られるのか？

誰とでもと思われたら、困るな。

誰かに相談してみるか。

頭の中で、女性脳と男性脳が双方の理性と良心について戦っている。モンモンと悩んだところで、気分を切り替えて食堂を掃除する。

朝食の後片付けが済み、皆が出す汚れ物の衣類を集め、

洗濯を始めようと井戸の脇に籠を置き、手桶に手を掛けた。

そこへサクサク、ザツザツ。

詰所から宿舎へと続く道の方角から

何人かの足音が聞こえてくる。

いつも通りの恰好をしていたマキトは、自分がラゼス夫人役をしていることを

すっかり失念していた。

騎士の姿を目にし、その背後に煌びやかなドレス姿の女性、両脇には侍女、

さらにその後ろを4人の騎士が着いてきたのを確認した。

「おいそこの者。ラゼス夫人を知らぬか」

先頭を歩いていた騎士が自分に声を掛けてきたことで、

一瞬誰の事かと悩み、「あっ」と声を出して自分の事だと気付く。

「お、じゃない。私ですが」

声を掛けた騎士は、癒し系美人な村娘が宿舎を手伝いしているとでも思っ

返答が返ってくる間があったこともあり、視線はどうしても胸にと

注がれる。

先頭の騎士ばかりでなく、後方の騎士達も顔を上げた美人な少女に見惚れている者がいたはずだ。

ユーシイ・ラゼスという王弟を夫にしている身分ある奥方が、村娘と同じ格好をして

洗濯をしようとしている事で、騎士を始めその場の全員が絶句した。

「その洗濯の中身は、どう見ても何人かの騎士の物のように思いますが」

侍女が量の多い洗濯物を見て呟くと

「そうですね」

と、同意する。

「そ、そなた。本当にユーシイお兄様の奥方なの？ラゼス家の家名を地に落とすつもりですか」

と、激しく叱責する声が辺りに響く。

普通の女性なら、恥ずかしくて逃げるか、困って泣いてしまつかもしれない。

だが、外見は美人で癒し系かもしれないが、中身は18歳の男。怯むことなく、役になり切った。

「この村は辺境なんですから、自分の事は自分でしなくてはいけない状況になります。

こんな田舎の村で、ひとりだけ着飾っている事の方が私には無理です」

どうだ。と言わんばかりに言い返すと、騎士達や侍女はなるほどと思ったようだ。着飾った女性には、地雷を踏んだ一言だったようだ。

「無礼な。私を第2王女リーシエと知っての言葉か」

上から目線の女王様な言葉に、これが王族の言葉なのかとマキトは感心してしまった。

だから返答が思いつかなくて、ほおと聞き惚れていたらまた地雷を踏んだらしい。

「おのれ。返答も出来ぬか。」

キーキーと激しく罵る言葉が次々並ぶので、侍女が慌てて宥めている。

「うわ。女って怖いなあ。これって、放送禁止用語ばかりだな」
ボソリと零したところで、しっかり聞かれて、物凄い言葉責めの嵐に騎士達も引いている。

この団体のもつと後方で見慣れた顔と目が合い、アイコンタクトが伝わったのか

大声で罵られているところに、第1王子とラゼスが数人の騎士達を連れて現れた。

詰所の裏手で、宿舍との間の20畳ほどの庭は、宥める者、守ろうとする者

揉めに揉め、「止めんか」と王子の何度が目の大声でようやく落ち着いていた。

ゼエゼエと声を枯らしそうになる王子に、マキトは慌ててキッチンから全員分のお茶を

用意してくると、騎士達を始め、侍女まで一息ついた。

「全く。リーシェ。どういうことだ。もうしばらくすれば、王都へ出立する時刻となるのに。」

何しにここへ来た」

「昨夜の夕食に夫人とお会い出来なかったので、ご挨拶をしたかったからですわ」

「……。挨拶は、見送りだと父上からも話しがあつたばかりでないか」

「あら。私は準備は既に済ませて、村を散策させて頂いていたのよ。ついでに寄らせて頂いただけですわ」

「お前が感情的になるだけだと、昨夜あれほど伝えただろう。ユーシイは、彼女を選んだ。」

お前ではない。お前が彼女を貶めれば、ユーシイが困ることくらい分らないのか？」

王子は、常に平等を心がける男だ。

真つ直ぐに、妹を諭そうと試みている。いつでも諭しているのだが、いかんせん

相手はいつまでも子供のような考えで、ちっとも成長していないよう。

「ユーシイお兄様は、どうしてもこのような身分の者を妻にされるのですか？」

王家に相応しいとはとても思えません」

向き直つて、ラゼスに向かって癪癪を起した子供のように吐き出してくる。

「リーシエ」

兄王子は自分の体で阻止しようとするが、それを押しやり、ラゼスに抱きつく。

「どうして、私ではダメなんですか」

「リーシエは、私の姪だ。妻とは思つことは出来ない」

わあわあと泣きだしてしまい、マキトはその激しい性格に驚かされた。

本当に好きだったんだな。

そんな言葉が頭に浮かぶ。自分が妻役を引き受けて良かったのかを迷い始めた。

そもそも自分は、天使のせいでの世界に落とされて

性別だって本当は違う
もしかしたら元の世界へ帰る方法があるかもしれない
そうになると、自分はこの世界からはいなくなる可能性もあり
妻役は彼女に失礼だったのじゃないかと後悔してくる。

傍から見れば、不安げな美人妻に見られたのか、ロツサが気を効かせて

「夫人、大丈夫ですか」

と、大声で呼んでくれるものだから、ラゼスは自分に抱きついてきた姪を宥めていたが
ひょいと両腕を掴み、自分から離すと、近くにいた王子へそのまま引き渡し

井戸の傍でグルグルと考えに耽っていたマキトの所まで走ってきた。

「マキト」

その声で、いろいろ考え込んでしまっただけで落ち込んでいた顔を上げることが出来た。

「済まない。大丈夫か？」

笑えただろうか。

落ち込んだままの顔になっただろうか。

「私は、私だけは認めない。絶対にお兄様は返してもらおうから」

大きな声で略奪宣言。

王子は大きいため息を吐いて、額に手を当てている。

天使、至急連絡を請う。
俺的には、ピンチだ。

選択の時、決心の時

あれから王女は騎士達に連れられ、王子達と村長宅へ戻って行った。俺も王に挨拶をすることになっていた為

王子付きの侍女が2人、ラミナとメイアがまた手伝いに来てくれた。

昨日のドレスは、川沿いの倉庫へ行ったものだから汚れが酷く。

第1王女が察していたようで、侍女へ渡してくれていた彼女のドレスを着ることになった。

「これです」

と、ラミナが箱を手渡してくれ、中身がピンク系のドレスで驚かされた。

俺にピンク？

早速ドレスを着せるに辺り

「やはり胸がつかえますわね」

忌々しげにメイアは、ドレスにメロンが入りきらないことを怒っている。

脇を少し缺で切ると、リボンと装飾品を縫い付けている。

どうにか収まると、出来上がりに2人が満足していた。

「いい仕事をしたって感じ」

「そうそう」

3人で笑った。

支度が終わると、礼装に着替えていた警備隊の面々と一緒に村長宅へ馬で向かった。

もちろん王都へ帰る侍女2人も乗せてもらっている。

「我々はそのまま領主のいる街まで見送りに着いて行きます」

「夫人は、村長宅からラゼスさんと宿舎へ戻ってください」

ラゼスさんは、一緒に行かないのかな？

そんな事を思っていると、当のラゼスがいないことに気付く。頭を左右に動かしたことで、誰を探しているのか一目瞭然。

一緒に騎乗してくれているターラントが気付き

「ラゼスさんなら、先に行ってます」

「あ、そうなんだ」

「彼もいろいろ事情があるそう。深くは知りませんが、大変なようです」

少し事情を話してくれて、マキトは頷く。

「そう」

王の弟なんだ。

もしかしたら、戻るように説得されているのかもしれない。

直ぐに到着した村長宅の敷地内では、たくさんの馬、王族の馬車が3両が

既に準備は万全。

後は王族の方々が馬車に乗るだけになって待機中。

マキトが到着すると、丁度村長宅から王族の方々が歩いてくるところ。

「マキト」

ラゼスが手を振る。

その彼は、王らしき人物と談笑しながら。

王の向こう側には王子が2人。

第1王女のアリシャが、マキトに気付いてラゼスの隣へ並ぼうとす

るところを

呼び止められた。

「夫人」

「王女」

「昨夜は申し訳ないことをしました」

彼女は相当反省したのか、頭を下げてきた。

王女なのに、この低姿勢。

俺は驚いて、頭を振る。

「いえ。分かって頂いて感謝します。この素敵なドレスも有難うございます」

俺が低姿勢で、ドレスの端を持ってお辞儀をする。

「寛大で頭が下がります。有難う。お詫びですが、王城へいらした時にでも」

歓迎するという彼女のセリフに頷いた。

「有難うございます」

「私の考えなのですが。お兄様と一緒に王都へ戻って頂いて、私の友人としてお付き合いしたいと思っっているの」

「有り難きお言葉。そのことについては私の一存では」

「そうね。分かっているけど。そうなったら、私は嬉しいわ」

彼女とほほ笑み合うと、王もラゼスも驚いている。

「仲良くなったのだな」

威厳ある低く響くような声。

王様って、迫力あるなあ。

そんな感想を抱くと、王はラゼスを促し俺に近づいてきた。

「そなたがマキトか。弟から話しは聞いておる。私の娘が申し訳ないことをした。」

許してはくれないだろうか」

「王女アリシヤ様とは、友人です。ご心配には及びません」

お辞儀をすると、彼は頷き、ラゼスとも視線を交わす。

「有難う。感謝する。ところで、夫人。ユーシィと共に王都へ来ないか」

「王都ですか？」

チラツと、視線をラゼスへ移すと、ラゼスはアイコンタクトに気付き

「陛下。私はもうしばらくこちらにいます。リーシエの婚姻が決まったら

お呼び頂けませんか？」

まだ諦めず、略奪宣言をした王女とは揉めることが分かっている。回避するには、離れていた方がいい。

「はあ……。そうだったな。全く成長出来ぬ娘だ。困ったものだ」

王が愚痴を吐いたことで、アリシヤは苦笑した。

「お父様。リーシエの嫁ぎ先を決めない」と

「そうだな」

手短に話、護衛の騎士達が日程を伝えたところで出発となった。

「王都でいつでも待っている」

「それでは」

先頭の騎士の号令の下、馬車も馬も動き出した。

その後ろを警備隊の4人が警護していく。

手を振る人には手を振りかえして、見えなくなるまでその場に立ち尽くした。

一緒に見送っていた村の人達もそれぞれ家や持ち場へ戻り始めるとマキトもラゼスに促され、宿舎へと戻った。

キッチンへたどり着き、昼はどうしようかと考えながら、しばらく野菜を見つめていると

王都のお菓子を持って部屋へ1度戻っていたラゼスが現れた。

「兄から頂いた。王都のお菓子を食べてみないか？」

「へえ、お菓子」

お茶を用意して、食堂のテーブルへ準備して席についた。

お皿に乗せていたラゼスから1つ奪うと、口へ放り込む。

「う、甘い。砂糖入れ過ぎで美味しくない」

「そうか？これが普通だぞ？まあ、確かに甘いかな」

「これ1個で糖分がどれだけあるのやら」

たわいない話をしているが、頭の中では自分の身の上の話をお話すべきか迷っていた。

「どうした？」

気遣ってくれる彼の顔を見て、男らしく真向勝負だと決意した。

「聞いてくれないか？俺の話」

真剣に言ったつもりだ。

それに対し、ラゼスも1度驚いた顔をさせたが、直ぐに気を引き締めようだ。

「君の事情か？」

「そうだ」

「なら、私もきちんと最初から話そう」

ゴクンと喉を鳴らし。

マキトは、言葉を選びつつ自分の今までのいきさつを話し始める。

「俺は、この世界ではない別の世界から来たんだ。それも理不尽な理由で」

どちらで生きるか

「生まれ変わったということか？」

ラゼスの言葉に、俺はドキッとした。

そうなんだ。

ちよっとモヤモヤしているのは、別の世界では男。体も心も男。

この世界では、体は女性。

心は、別の世界の男のもの。

「それを転生と言っただろう？」

「転生」

「男だった記憶が無ければ、最初から女性として生きることが出来たとは

思わないか？」

「女性」

言われて気が付いたのは、今体は女性体だということ。

胸はあるし、男ならではのものもない。

完全に女性体。

心は男性というだけで。

もしかしたら、男同士という展開かと思ったが、そういうことではない。

体は女なのだから。

女だと認めたら、女なんだろう。

「自分が今は女性だと認めるのを怖がっているように見える」

「そ、そうか。確かに」

元々男なんだから。

女性としての自分を受け入れ出来ていないのかも。

「だ、だってさ。俺、自分から女になりたいなんて、一言も言っていない」

つい声を荒げてしまい、目から涙が零れてくる。

この世界へ来て初めて俺は、自分自身について考え、泣いている。

今まで毎日が忙しくて、疲れて眠ってしまうから

ここまで考えることがなかった。

悔しいと思ってた。

努力してイケメン目指して、頑張ってきたことが全て無駄になった。

自分を否定されたんだと思うと、凄く悔しい。

涙は後から後から零れて、指で拭いきれなくなった。

温かい手が自分の手に被さり、引き寄せられて彼の胸で泣く。

本当はそれすらも嫌だ。

こんな女々しい自分が嫌だ。

俺がこれだけ言っているのに、目の前の男はびくともしないし引くこともしない。

「俺、元は男だったんだ」

「ああ」

「分かってるのか？」

「今、聞いた」

「.....」

それでも背に腕を回しているのは、どうしてだ？

「今のマキトが、気に入っているからかな」

「今の？」

「そう。今は女の子だろう？」

一瞬、何を言われたのか考えて、自分自身を見る。

「た、確かに女だ」

「男じゃないだろ？」

「あ、ああ」

「この世界では、女の子。それでいいと思うが、どうかな」

随分出来た野郎だなと思いつつ、顔が熱く感じる。

女として生きるしかないのか、俺。

「俺」

言いかけてン涙と嗚咽で上手く言葉が見つからない。

「ずっと言いたくても言える機会がなかったんだな。よく我慢してたな。」

聞くこともしてやれず、済まない」

「あ、・・・ぐすっ」

こんな理解力のある男がいるのか？

俺を受け入れられるなんて。

「このまま妻でいて欲しいと思うのだが、どうだろう？」

考えてくれないか？君がいなくなったら、妻に逃げられた烙印とか甲斐性ナシとか言われそうなんだ。助けてくれないかな」

耳に心地よい声が聞こえ、その内容にくくくつと笑みが零れる。

「分かった。ラゼスさんが良いと言っなら、このまま
俺が了承すると、彼は一層強く抱きしめてくる。」

「妻なら言って欲しい言葉がある」

「何？」

「貴方とかユーシィとか」

胸に顔を埋めているので、彼がどんな顔でそのセリフを言っているのか分からないが
きつと耳が赤いはず。

「呼び名のことか？」

「そうそう。その方が嬉しいかな」

俺はふと考える。

このまま天使が俺を回収しに来なかったら、この世界で女性として
生きることになる。

その時に支えてくれる存在があると、俺はこの地で立っていられる
だろうと。

「はは。本当に夫婦だな。は、いくぞ。・・・あ・な・た」

してやったりのつもりで言っただが、俺を抱きしめたまま体が揺
れて

「うわ・・・」

「え？」

ラゼスは後方、俺は前へつんのめり、大きな音をさせて椅子が倒れ
床とぶつかって、しばらく2人で仲良く気を失っただった。

数時間後、目を覚ました時、ラゼスは背中強打、後頭部にたんこぶが出来ていて

俺は彼の胸に強く鼻をぶつけたので赤くなっていた。

なんだよ、このオチは。

隣国の使者

王族達が帰還して半年経った。

ラゼスとマキトの夫婦の件は、そのまま続けている状態だ。

村人達も警備隊の仲間もすっかり夫婦として認識している。

今では誰もがマキトを夫人と呼ぶ。

穏やかな日常、豊ではないが、それなりの生活を送っていた。

その日、詰所には隣国との国境にある国境警備隊から伝書鳥が1羽飛んできた。

この世界の一番速いと言われる賢い鳥で、見た目はつばめと鷹が合わさったような姿。

その鳥の足に小さな筒が付いていて、その中に手紙が入るといっどこかで聞いたことのある伝達方法だ。

「なんて？」

その手紙を広げたバンハトは、皆の視線に促され、早速手紙を読み始めた。

「隣国バーシャランの第1王子の部隊50人が国境を越えたと。内容には、王城へ向かうことと

わざわざ回り道で、この辺境の村へも来るとのこと。

第2王女の婚姻にも関わる話があると」

「なんだろう？」

全員が顔を見合わせる中、ラゼスは肩を落とした。

「俺のことなんだろう？」

村長宅へも皆で話し合いをし、敷地内の施設を利用することや食事の事も頼んでおいた。

「王族が来たような感じになりますね」

「そうだな。王族には違いないな。人数は50人程。はっきりと人数が確認は出来ていないが、

この人数で知らせがきている」

「分かりました。国境からはどのくらいになりそうですか？」

「3日はかかるだろう」

「そうしましたら、それまでに準備ですな」

リーシェ関連での話とは、叔父である自分しかないと思い込んでいた。

山を越え国境から3日程掛かって、小規模の軍隊が到着したのは夕刻だった。

一番最初に見つけた村人が詰所へ走ってきたことで、伝えられた。

「隣国の旗で、軍隊が攻めてきた」

「落ち着け。友好国だ。大丈夫だ」

落ち着きのない村人を宥め帰したところで、皆が顔を見合わせ頷く。

「いよいよか」

「平穏で過ごしたいな」

その後十分して、隣国の騎士が1人早馬でやって来た。

その騎士が言うところは、2泊泊まること、女神の森へ行きたいこと、

こちらの王女の願いを聞き届けたいのである女性を探しに来たこと。

「女性？」

5人が首をそれぞれ傾げたところ、隣国の騎士は王子からの話しをする。

「実は、こちらへ訪問することになった理由なのですが。こちらの第2王女との婚姻の話があり

殿下へ条件を出されたのです。美しいと評判の王女でしたので、殿下は願いを叶えたいと」

それが女性？

「こちらの村に、マキトという女性が住んでいるとか。その女性を侍女に連れて行ってくれるなら婚姻を承知する」といふ

騎士の口から言葉が出された途端、ラゼスの顔は強張った。

「何、そんな条件をリーシェが？」

「はい。後は殿下からお話しがあります」

騎士は物腰柔らかな態度で、警備隊である皆に騎士の礼をしたところ

ラゼスが、宿泊先になる村長宅の敷地内の施設へ案内することになった。

願いごと

「はあ？」

隣国の王子と小規模の軍隊が、この村へ滞在するという話と自分が第2王女の侍女になる話が出ていると聞き、俺は持っていたおたまを落とした。

「なんでやねん」

しーん。

大阪弁で手を翻してみたが、ラゼスには通じなかった。

くそ。一応ボケつつこみを試みたかったが、相手が堅物では通じないんだな。

ははは、乾いた笑いをしながら、方向転換。

緊張感が全くなくなるので、俺はサツサと夕食の準備を整えいつでも食べられる状態にしてから、食卓テーブルの前で頂垂れて突っ立っている男の前に立った。

「それで？隣国の王子と話し合いをしたのか？」

そこが気になるところだ。俺が隣国へ行くことになってしまつ。

ラゼスは先ほどから仏頂面。

「これからだ。今は着いたばかりで、宿泊準備で忙しいことと、休息時間を入れるらしい」

溜息交じりでようやく口にした言葉には、本人も不安な事が知れる。俺はなんとも言えず。

「そうなんだ」

目が合うと、腕が伸びて来て、いきなり抱きこまれて、その主は大きく深呼吸音。

なんだ？愛情不足か？安心不足か？

と、考えていたら、その腕が振るえていることに気付いた。

「ユーシィ、どうした？何か不安が？」

少し顔がずれて、顔を上げたラゼスさんと顔が触れ合ったかどうかの瞬間

水がポタリと頬を伝わったので、俺は慌てて彼の両頬を両手で挟み顔を無理矢理合わせる。

「なんで、泣いてるんだ？」

「悪い。俺は自分が情けなくて」

「どうして？十分やってきている。あんたが情けないなんて、誰が」

俺はラゼスさんに言葉で応戦してしまう。

「はは、そう怒るなよ。俺は、マキトがどこかへ行ってしまうことを恐れている。

異世界から来ているだけに、いつか天使が迎えに来るのじゃないかと思ってる。

今こうして半年一緒にいて、いつてらっしゃいとかおかえりとか毎日の食事を味わって、幸せを感じている。

今、いなくなったら、俺はきつと自分が生きて行く意味を失いそう

なんだ」

「どうして、そんな突飛な話しになってるんだよ」
涙を甲で拭きつつ、くぐもった声で彼は語る。

「今日、リーシエの思いつきで隣国の王子にまでマキトの話が出た瞬間に

その存在を失うという事を考えてしまった。この話しについては、相手の王子と話し合う。

決して、お前を行かせないし、この話を決着させる為にもマキトを連れて、

俺も王都へ一緒に行くことを考えている」

「ああ」

「それと同時に、いつか消えてしまいかもしれない不安の方が大きい。

消えてしまう前に、この世界にいた証を欲しいと思った。俺に残して欲しいと思ってる。

それがマキトには酷い事を言っていると思ってるが、願ってしまう」

一生懸命訴える男が言わんとしている想い。
それは・・・。

「ユーシィ」

「考えて欲しい。俺は・・・」

彼はその次に出る言葉は言わない。

でも、俺には何が言いたいのか、なんとなく分かった。

それから、村長宅から言伝を預かってきた手伝い人が王子が食事へ招待してきたことでこの話はそこで終わった。

「久しぶりだな。王都中央大学卒業以来だな」

隣国バーシャランの王子は、ユーシィ・ラゼスと同じ歳で、同じ学生時代を過ごした友人同士性格も穏やかで気さくな男性だった。

「君の隣の女性は？まるで先ほど村長から見せて頂けた女神を思い出させるな。」

美人で、その・・・コホン・・・理想だな」

その視線は、やはりメロンだ。

俺は苦笑しながら、第1王女が贈ってくれたドレス着ていて、ドレスの端をつまみお辞儀をした。

「私はこの国の隣の友好国バーシャランの第1王子 ラシャ・ナサラ・バーシャランだ。」

紹介してくれるかな」

王子なのに、丁寧に自己紹介してくれる。

物凄い褒め言葉に、俺は背筋がゾクゾクした。

普通の女性なら、頬を赤くして照れたりする場面だと思うのだが俺は頭の中男なので、男性から自分の姿を女性として褒めてもらっても

寒くなるのだ。

「彼女は、俺の妻。マキト・ラゼス」

夫役のラゼスが紹介したことで、俺は慌ててお辞儀をする。

「え？マキト？」

「そうだ。ラシャは、リーシエに難題を言われたことになる」

言われた王子は腕を組み、考えるしぐさをとった後に、結論をまとめようで

「なるほど。彼女は昔から君に傾倒していたからな。まさか君から妻を奪ってやるうとは

かなり小悪魔だね」

「それでも妻に臨んでいるラシャは凄いなと思うね」

ラゼスに皮肉で返された王子は、うつむと言いながら、全員を席へ促し

食事をしながらにしようと執事役にワインらしき物を頼んだ。

「まあ、その話しも兼ねて食事を始めようか」

辺境の地で、王子はまともな食事を期待していなくて、持参してきた自国の食べ物を料理人に作らせたとかで、逆に持て成されて、マキトの探究心を煽った。

「う、旨い。こ、これはどういう調理方法ですか？」

給仕している男性を呼び止めては、マキトは持参してきたメモに書き込みしている。

「ははは、随分熱心な奥方だな」

「はは。ここでの食事は彼女が作っているからな」

警備隊の宿舎で生活していること、洗濯から三食の食事や弁当を作

っていることを話すと

王子は驚く。

「へえ、王弟の妻が？それは凄いな」

「旨いぞ」

「それは羨ましい。明日にでも招待してもらえるかな」

「はい、いいですよ。お昼にされます？夕食？」

俺は、普通に話していた。

それを周囲の給仕係や背後の騎士は驚いている。

うわ、しまったと思った時は、王子は笑っていた。

「このような場所だ。お前たちは大目に見てくれ。私の友人の妻だ」
騎士達も了承し、その場は元の雰囲気へと戻った。

俺も安堵した。

「ところで、リーシエ姫は、ユーシィの妻を侍女になどと条件を言うという事は

私とは婚姻を望んでないということかな」

王子の言葉に、ラゼスは木のコップの酒を飲みながら、「分からない」「と零した。

「どうして？」

「俺を苦しめたいとか、マキトを俺から離そうとか、ラシヤにどうかではなく

俺達を憎く思っているのじゃないかと考えている」

不思議そうな顔をさせたので、半年前の話しをすると、王子はなるほどと頷いた。

「叔父のお前に相当入れ込んでいたわけか。この辺境の地にいるのもそういう理由か。」

リーシエ姫は、もしかして恋が破れても納得出来ず、
相手を追い詰めようとの魂胆かもしれないね。まだまだ子供だ」

「早く、バーシャランへ連れて行ってくれ」

酔った勢いなのか、ラゼスが本音を吐き出したことで、王子は爆笑。
「ははは。叔父上は、お困りのようだ。だが、私も手を焼く彼女に
ちよつと呆れているところなんだよ。」

そうだな。まだ大学にいた頃は、可愛らしい姫君だと思っていた。
妻にと考えていたが、こちらからの手紙や贈り物にも素っ気ない。
そろそろ婚姻の話の打診をすれば、このような結末」

王子が疲れ気味だと身振り手振りで話し、両隣りの腹心の騎士達も
頷いている。

「王子、飲み過ぎでは？」

控えていた女性騎士が、後方から声を掛けると、王子はそうだなと
頷いた。

「お前もそう思うだろ？ たかだか女性1人。このような辺境の地へ
私を行かせることに」

一国の王子であり、皇太子殿下を顎で使っているのじゃないか？
それを言いたいのだろう。

女性騎士もそれを理解しているだろうし、主を振り回している王女
に何か思つところもあるはず。

「殿下が私の意見をお伝えしてもいいという許可を頂けましたら
「許可する」

「私も今回の条件は、殿下は振り回されていると感じております」

王子に賛同する意見を述べると

頭を下げ、木のコップを王子から受け取り、彼女は給仕へ渡す。

代わりのコップへ水が注がれると、王子の前に薦める。

「どうぞ」

「済まないね」

王子は礼を告げると、ラゼスへ向き直り。

「お前が羨ましいよ。国問題から外れ、隣には女神のような美人の妻がいて。」

俺には一緒に国を見ようとしてくれる正妃が見つからない」

たぶん、リーシエ姫には無理な話で、今回の婚姻も両国の繋ぎの為の政略婚なんだろう。

隣国バーシヤランは、小さな国だ。

このエリクシアル国の方が大国になる。

「ラシヤ。君が嫌なら俺が助言する。妻も同行になるが、王都へ行くことと考えている」

「一緒に行ってくれるのか？」

「ああ」

「助かる」

そうして、ラシヤ王子は表面上の顔ではなく、本来の青年らしい顔を友人であるラゼスに促した。

王都へ

次の日、男同士で話があるとかで、ラシヤ王子とラゼスは2人で話しながら歩きだした。

後方に護衛の騎士3人、さらに後方には5人と侍女2人（お茶等担当）の行列で

女神の森へと入って行った。

王子が女神の森へ行きたいという希望を兼ねて。

俺は宿舎で、明日の朝出立するラシヤ王子に同行させてもらうために準備を始めている。

着替えに出来そうな衣類は、この半年で少しづつ増えていた。

普段着や下着は、村の人からの頂きもの。

ドレスは、なんとか汚れを落としたラゼスさんから贈られたドレスと半年前の第1王女からの贈り物のドレスが1着。

後は、料理をしたいこともあり、調味料も持って行く。

フライパンに包丁に鍋は、

ラゼスさんに小ぶりで

新しい物を村の鍛冶屋で買ってもらった。

この半年で、ガスや電気ではなく、

蒔きや炭を燃料にしている窯での料理の腕があがった。

新しいフライパンは特に嬉しい。

ラゼスさんの持ち物は、剣と王城へ入る為の正装。

出立の時は、騎士の服装で馬に乗るとか。

あ、俺。馬は乗れないぞ。

と、思っていたら、手伝いに来てくれている隣国のラシヤ王子から

頼まれてきている年配の侍女さんがさり気なく

「馬に乗れないのは、私達侍女も同じです。私達女性の馬車へ乗ってくだされば宜しいですよ」

今回、馬車は3両。(馬車の単位 両か輛だそうです)

3両目に侍女が6人乗りに5人で使用しているので、同乗出来るそう
うだ。

「今回は、往復1か月を見込んでのことで、なるべく簡素で移動したいとか。

あまり人数がありませんので、自分の事は自分でが暗黙のルールになります」

「そうなんですか」

「荷物はこれだけでよろしいのですか？」

あまりに持つて行く物が少ないので、5日間分大丈夫なのかと心配されてしまった。

「他に何か持つて行くのに、必要な物を教えて頂けないですか？」

旅は初めてだと伝えると、心得ているのか、あれこれ女性の嗜みグッズを教えられた。

「奥方様は、その・・・化粧というものをされないようにお見受けしますが」

「ははは、その通りです」

「・・・・。この村では、あまりその類は売って無い様子でしたわね。」

王都へ着いたら直ぐにラゼス公にお願いされると良いでしょう」

ラゼス公。

公爵。

それがラゼスさんの爵位だと認識したのは、侍女があれこれ王都の話が出始めた時だ。

王の弟だから、爵位はあるだろうなと思っていたが、
王の一族だと改めて思い知る。

ラゼス家は、王家族以外の一族が名乗る家名。
成人を境に、エリクシアルは名乗れなくなり、王の一族が使用出来
る名を頂き

それが王の一族の証になる。

警備隊の皆は、家名を知っているから既に承知していたことになる。
親しく「さん」付けにしていたのは、きっと気さくなラゼスさんが
初めに約束させた
としか思えない。

侍女に自分が平民で、王族や王都について何も知らない話を振る
と、

凄く感動され平民でも貴族との婚姻が出来、しかも正妻だという事
実に涙を浮かべていた。

「あの」
「貴女は幸せですね。私達のような下の者であれば、誰もが夢を見
てしまうこと。」

実現出来たこと、他の侍女達も感激するでしょう。応援しておりま
す、ラゼス夫人」
涙ながらに語られ、ある意味驚かされた。

この世界にも身分制度の壁や正妻に出来ず、側室になっている貴族
の話や

別の国の王族の話まで聞かされてしまった。

「この国について、私がお聞きしている話ですが。現王は正室第1
子。」

ラゼス公は、現王が22歳の時前王が側室に出来たお子。

王位継承権は、公が18歳の成人の日に正式に辞退し、爵位は公爵で落ち着いたものの

王の臣下として動くことになっているとか」

隣国の侍女長なのに、かなり詳しく解説してくれるので、どこの情報なのかを尋ねてみると

「それが、王国間の侍女同士は、滞在している間、控えの間で寛く機会があります。

長く滞在することがあれば、話しもいろいろ出来ますので、そういう機会に情報交換として

国が傾くような事以外の悩みを話すことがあるからですわ」

女ばかり集まればだな。

俺は、目の前の侍女長がお茶しながら他の侍女達と談話（愚痴かもしれない）する絵図を

想像してしまった。

俺が今話した話も、平民が公爵夫人に昇格とか玉の輿だのと、話しが回るのかと思うと

言ったことを後悔しつつあった。

お昼になり、警備隊の皆にはシチューとパン、干した肉を柔らかくして煮物にしたものを

食卓テーブルへ並べ、一か月王都へ行く話しをすると

既にラゼスさんから話しは通じていた。

「やはりなあ」

「穏やかに話しが済むことを祈っているよ」

「有難うございます」

俺は、しばらく会えないことで寂しさを感じてしまう。

「はあ、村で唯一の癒してくれる女性がいなくなるのは、寂しいなあ」

「そうそう。村の女神さまだものな」

ロツサとベルダが大げさに手振り身振りで表現するので、その場は明るくなった。

俺の方は、この村へ戻ることの決意を新たにす。

俺には、絶対に社交界とか無理だから。

辺境の地、ラシエ村をしばらく留守にすることで、1か月程警備隊の宿舎のあれこれを

引き受けてくれると言う女性にお願いした。

その夜は、何かと興奮しているようで眠れなかった。

中でもこの村から出るということ。

王都へ行くということ。

5日間の旅。

いろいろな事があると分かっているが、わくわくしていることもある。

考え過ぎて、ますます目が冴えてしまった。

隣の部屋で、夜遅くゴソゴソ何かをしているラゼスさんの様子も気になり、

今後の事も2人きりになれる今の内に話をしようと部屋をノックしてみた。

コンコン。

「誰だ？」
「俺です」

しばらく間があり

「どうぞ」

と、ようやく返事を貰ったところで、ドアを開ける。

俺が不安そうに見上げた事で、彼も何かに気付いたのか
部屋へ招き入れると、少し前に作られた温かいお茶を木のコップへ
移して渡してくれる。

簡易の椅子を勧められて、腰かけた。

「キッチンへ行っていたのですか？」

「ああ、いろいろ考えることもあった。この部屋もしばらく空くの
で、その整理も兼ねてな」

「まだ・」

「いや、もう終わった。そろそろ寝るとするよ」

1日ラシャ王子と話し合い、女神の森へも同行し、かなり疲れてい
るはず。

「俺、考えも無しにすみません。部屋へ戻ります」

コップを近くの机に置くと、慌てて立ち上がった。

「待て。もし時間があるなら、少し話をしていかないか」

彼も今後の事が気になっていて、マキトと再度きちんと話し合っ
たりしていたことを

打ち明けてくれて、

2人で気になっている事や今後の打ち合わせを、夜遅くまで話し込
んだ。

そのまま眠り込んでしまい、慌ててそれぞれの支度にかかるという
慌ただしさになり

俺的には反省。

朝食を採り、村長宅へ行くと、既に支度が済んで待っていたラシヤ王子に迎えられ、直ぐに出立となる。

ラシヤ王子一行は、王都へ向かった。

王都へ（後書き）

爵位については、別の方の解説を参照。
参考になっているのは、イギリスです。

王の一族（弟など）に与えられたのが「公爵」

地方の有力者に与えられたのが、「侯爵」

家臣に与えたのが、「伯爵」

上級貴族の代官が「子爵」

地方の名家が、「男爵」

陰謀

王都へ3両の馬車と50人程の屈強な騎馬隊の一行が道を急いでいた。

辺境の地、ラシエ村から5日掛かると聞いていたものの山を越えるということが、いかに大変かを身に染みだ。

1日目の夕刻は、山頂付近で魔獣が5匹の群れで襲い、騎士達が上手い具合に退治。

5匹が狩りをするように馬を追いかけて行くので、それを計算して10人の騎士が、弓で一斉に射るとか。

掛け声がまた格好良い。

「打て」

「・・・、左・・・右へ」

「走れ」

2人左右に回り込んだところで。

「今だ」

飛びかかったところを横へ移動していた者が、2人で左右から横突き。

最後に背後から飛び乗って突く。
神業だ。

木の上からの襲撃に備えて、降りてきた所を上から剣を一突きとか。その無駄のない動きに、鍛えられた力に驚くばかりだ。

馬車からその戦いを見ることになったが、映画の一場面を見ているようだった。

危機感がないと言われそうだが、本当に人間てこんなに柔軟に剣さばきが出るのだと確信した。

魔獣退治にいくつかの方法があり、騎馬隊には5つまで作戦がある
そうで

今見た光景は、その作戦を2つ目まで使ったそうだ。

夕刻なので、日が完全に沈む前までが勝負。

全部見たかったが、5つ目までを使う時は、最終作戦に入
ことを示し

これを外すと後がないと聞くと
ちよつとどころか背筋が寒かった。

「しかし、珍しいな。この魔獣は久しぶりに見た」

「そうですね。この辺りでは見ないと聞いていましたね」

隣国の騎士達がタオルで血しぶきを拭き取りながら、不思議そうに
零した。

その2日後には、盗賊と遭遇。

いかにも前からこの道を王子一行が通ることを知っていたような襲
い方だ。

流石はと思うような騎士達の活躍。

山の中、崖上からバラバラと剣を振り回したり、飛んで降りてきた
りの盗賊団。

大柄な男や顔に傷があるもの、いかつい顔の者、とにかく柄が悪い者の集団だ。

魔術師はいないようで、煙玉やら、2本の剣の使い手とかいろいろなパフォーマンスぶりだ。

計画的に馬車を狙っているのだが、騎馬隊の方が一枚上手。

剣が振られると、直ぐに打ち返し、マントが翻り

留めの一撃。

「うわあ」

「でやああ」

いろいろな奇声や掛け声が聞こえるが、力の差は歴然。

騎士の中には2人ほど怪我をした者がいたが、他の騎士達がなんなく打倒してしまった。

盗賊一派は、総勢20人。

指示を出していた頭的存在を除いて、全て倒した。

強い騎士達に、俺は心の中で拍手喝采している。

ひと段落したところで、辺りに襲撃の気配も何もないことを調べ

一行も休息をとることになった。

騎馬隊の隊長は頭的存在の男を縄で縛り、首に短刀を突きつけて相手を牽制。

急遽大怪我ではないが、切り傷、かすり傷等の化膿を防ぐ為にも

全員の健康診断することにし

簡易テントが張られた。

尋問は、その端で行われた。

「ここへ我らが通ること誰から聞いた」

「さあな」

隊長が異変を訴える。この辺りには山賊はいないはず。

あまりに辺境に近い山で、人が滅多に通ることがなく

山賊業するには不向きな場所だからだ。
様子を見ると、盗賊団で、山賊でない。

そこが問題なのだ。

「誰かに王族が通ると教えられていない限りは、我々の事は分からないはずだ」

「あ？何。王族だと。俺は、貴族がここを5日後に来るからという情報を・・・」

明らかに動揺し始めた男は、自分が騙されたことを知ったようだ。

「なんてことだ。俺は王都に住む盗賊団の頭だ。酒場で金になる話だと、聞いた。

情報料も結構支払った。なにしろ、かなりの貴族だからと聞いている。

まさか隣国の王族とは。しかも有名な強豪騎馬隊と一戦交えるなんて正気の沙汰じゃねえ。知っていたら、仲間を危険な目に遭わせなかつた。

なんてことだ・・・」

50代近い男が男泣きしている。

何十年と連れ添った仲間達全員を失ったのだ。

その悲しみは、計り知れないのだろう。

「誰から聞いたのかは分かるか？」

「ああ、王都内の酒場の情報屋。賭場のザンゴというケチな男だ。

だが、あの男の情報はいつも確かだ。

まさか嵌められるとは・・・くそっ」

頭と名乗る男の集団は、王都を拠点とした有名な盗賊団として名を
知れ渡らせていた。

それほど金に困っていない盗賊団だったが、

一世一代の大儲けが出来たらと話を盗賊仲間達にしていたこともあり

情報屋に儲け話があれば言ってくれとも前から言っていた。そこへそのひとり、ザンゴという男からこの道を通る貴族の情報を聞き、その情報を買ったということだ。単なる金持ちの貴族と聞いていたが、実際は隣国の王子の一行。有名な強豪騎馬隊も引き連れている。勝てるわけがない。

「何故嵌められたと思う？そいつに何かしたのか？」

情報屋が嵌めるなんてことあるのか、客なのに。信用問題もあるはず。

他の騎士が質問すると、男は笑う。

「あいつが誰かを嵌めることは初耳だ。あいつも騙されたのかもしれんな」

「その男を捕まえる。もう少し詳しい情報をくれないか。そうすれば、多少は恩赦があると思うが」

男は首を振る。

「恩赦はいい。仲間皆死んで俺だけ助かるのは無様過ぎる。だが、あいつを捕まえてくれるなら情報を渡そう。必ず、捕まえてくれ」

盗賊の頭は、皆と逝きたいという事で、他の盗賊と同じように山道の脇に石の墓が建てられた。

「偶然だとは思えない。我々を狙っている者がいるようだな」

「隊長」

「王子と公に相談だ」

マントを翻し、騎馬隊は人数確認、怪我人の治療を行い、その場か

ら一行は出立した。

馬車の2両目にラシャ王子とラゼスは乗り込んでいた。

その馬車へ極秘会議ということで、隊長、副隊長が乗り込み、王子へ報告している。

「何。先ほどの盗賊は王都からだ」と

「どうやら、この一行を狙う奴がいるものと思われます」

「俺達夫婦がいることも知っているのだろうか？それともラシャを狙ったのか？」

今回2回の襲撃で、確実に狙われている気がする。

ラゼスが王都にいる貴族や王族で、隣国の王子の命を狙って、誰が特になるというのか

犯人の検討をすると、ラシャは俯いた。

「エリクシアル王が私の国を属国にすることを考えるととは思えないのだが」

「ああ、兄上は戦争がお嫌いだ。現状維持を考えているはずだ」

「ユーシィ。俺の国を狙って、得する貴族は？それかこの国の貴族間で誰かを陥れるという可能性は？」

「ああ、半年前に会った時に、兄上が心配していたのは、宰相の義弟だ。

今年35歳で独身。小さな問題をいくつか起こしているようだから、危惧していた」

「宰相の妻の弟か」

「ん、宰相の2番目の妻だな。正妻は恋愛だったはずだから。2番目は確か、政略結婚だ。」

妻の弟は、宰相の義弟ということで、幅を利かせて困りごとを作り、王がよく宰相を窘めていると」

宰相の2番目の妻の弟の爵位は、子爵。姉が宰相の妻だということ

で、
発言力を強めて来ていることで悩んでいたことを話すと、ラシヤは怒った。

「もしかしくとも、私達の国を侮辱しているな。その子爵」

「なあ、もしかして王女へ手紙も贈り物も渡っていない可能性もあるぞ。」

今回の婚姻の条件にしても、誰も止めなかったというのが、おかしい。

おかしい文章を書いていないか、侍女長も確認するはず。もちろん外交をしている臣下も

存在している。リーシエとはどんな方法で連絡を取っていたんだ？」

リーシエに直接隣国へ手紙を渡せる内密の家臣なんてものは、いなかったはずだ。

「そういえば、こちらは使者をだし、手紙と贈り物を月に1度届け

ている。
あちらの手紙は、その時に使者が受け取っているが気にしたことがなかった」

通常通りで、問題なく。

計画的に何かをしようと思んでいる気がしてならないと言うラゼスに
一同は頷いた。

「ラゼス公の意見に賛同致します。1日目の魔獣に関しても、
この山頂付近では見られないものでしたから。

誰かが故意にこちらへなんらかの手段で運び込んだかしなければ、
考えられない」

隊長が言葉を選びながら話し、それ副隊長の女性も頷いた。
「そうです。あの魔獣がいたことは驚きました。あれは、
この国の北の国との国境近くの山にいるもの。
この付近では、聞いたことはありません」

リーシェ王女の計画なのか、宰相の義弟か。

「ユーシィ。魔獣を捉える程、こちらは技術か何かを持っているのか？」

「いや、まさか。魔獣を捉えるなんて、余程の・・・」

「心当たりでも？」

「この国に3人いる魔術師か宮廷薬師なら、出来そうかなと思う」
魔術か薬で。

ガコン。

何か馬車の車輪に引っかかるものがあり、大きく傾ぐ。

馬車が止まると、周囲にいる騎馬隊も止まる。

「なんだ？」

「見て参ります」

隊長が、馬車を降りると目の前には槍を持った騎士。その背後には
軍隊。

「え？」

その騎士の特長は、この国の物。

バーシャランの隊長は、次に続けるはずの言葉を飲んだ。

「どうした？」

ラゼスが馬車から顔を出すと、自国の騎士が目を見張り、

ラゼスを確認してホツとした顔になる。

「ラゼス公、ご無事ですか？」

槍を持ち、武装している面々に出会い、ラゼスは驚いて馬車から出た。

100騎は超える軍勢だ。

「は？なんのことだ？どうして、ここに軍隊が。俺は、王都には俺が行くことを

伝えてないが」

慌てて自国の騎士達の戦闘準備を解く。

「これはどういうことだ。お前たちの隊長が將軍は誰だ」

「私です、公。お久しぶりです。無事保護出来たこと安心いたしました」

王都でラゼスとは仲が良く、信頼出来る一人。青の將軍ザルタス。大柄でユーモアのある40前半の男だ。ちなみに妻子(3人)あり。馬から降り、騎士の礼をする。

「どうして、お前が？」

「はて。俺は、貴方が人質として連れ去られたとバツフェル子爵から話を伺いました」

違うのですか？と返答が返ってきた。

「それに、この話しは、警備隊からの通達です」

「通達？伝書鳥が使われたのか。それも警備隊からだ？」

ラゼスが大声を上げると、いつの間にか隣りに立っていたラシャ王子も驚く。

「そんなバカな。誰からだ？」

「こちらをご覧下さい」

將軍が懐から小さな手紙を取り出し、ラゼスに渡した。そこには子爵宛てに、ロツサの名が記されていた。

しかも、王弟ラゼス公が女神のような容姿である奥方と人質として隣国バーシャランの王子に捉えられたことになっている。

「ロツサが・・・子爵と通じていたのか。王都は、王都は今どうなっている」

ラゼスが慌てると、將軍は肩を落としながら宰相が倒れて、何故か代理でバツフェル子爵が就いていること。

王も体調が悪くひと月前から朝議にも出られない状態で、王の代理で第1王子が

立ち会っていることが告げられた。

ラゼスは振り向くと、ラシヤと目を合わせた。

「ユーシィ。どうやら我々は謀られたようだな。子爵は、君の仲間であるロツサを

裏切り者として認識させる為に、その手紙で証拠を渡している。

裏切りをこちらがこのような形で知らされたことで、ロツサも嵌められたと思う。

王都は、その子爵の手に堕ちていると思われる」

その言葉に頷き

「將軍は、どう思う」

と、問う。

「突然のことで驚いております。

今の話をなんとか解釈するなら、俺はここへ来てしまったことで公を拙い立場に

追い込んだ気がします。

本来は、王弟殿の奪還作戦をしているはずですが100騎連れて来てしまっています。

今まで公達が何らかの仕掛けをされて大変な目に遭っているということ

ことで

本来は、無事では済まないところ。

ほとんど無事という話になるなら
王弟殿と王位奪回の戦を仕掛けるとか作り話が出来ている可能性があります
あります。

こちらへ来たのは、内密にこのことで、他の將軍達にも知らされていないはずなので

子爵が王位を狙っているとしたら、ひとりでも王族は減らしたい。
反逆者に仕立て上げれば、民を動かしやすいし
軍隊も動かしやすい。

將軍は、大きく肩を揺らし

「まさか。こんな手に俺が踊らされたとは。子爵が宰相の代理という事が

そもそもおかしいと何故思わなかったのか、城にいた頃は、
俺自身おかしかった」

「そうだな。義弟が宰相職に就くことがまずおかしい。誰も異議は？」

子爵でたかだか宰相の2番目の妻の弟だ。何故宰相の職を代理で出来るのかが問題だ。

宰相職は、それなりの者になる。宰相は、本当に義弟を推薦したの
だろうか？

「ただ、何故か了承してしまったような」

「何か変わったこととか、おかしい現象とかなかったか？」

「・・・ああ。そういえば。あの香りは・・・。今気付きました。思考をおかしくする麻薬の花レリイシーだ」

隣国バーシヤランにしか咲かない花だ。

どこに株や種を撒こうが、よその土地では根付かない。

バーシヤランにしか咲かない花で、国外には持ちだせない規則がある。

ラシヤ王子は、青ざめた。

「私の国の花がどういうルートで？持ちだせないように王の庭でしか咲いていないはずだ。

誰がそれを盗んで国境を越えたというのだ？小国ゆえ国境は厳しくしているはずなのに」

ラシヤ王子は自分の臣下たちに訴えると、騎馬隊の騎士達も頷いている。

ラゼスの方は、再度手紙を読み直し、ロツサの名を確認して溜息を吐いた。

長年一緒に仕事をしていた仲間の一人だっただけに、裏切り行為に落胆が大きい。

「ロツサが裏切るとは思わなかった」

「だが、その者も嵌められたということですよ。字は本物ですか？」
将軍が問質するが、見慣れた文字。

手紙の内容は、自分の事や事細かに村の話が書いてある。

ラゼス夫人を独身である子爵にも興味を持つようにもされている。もしかしたら、ロツサは子爵も陥れるつもりなのか？

王弟の妻に興味を持たせて、彼が妻にしようとな画策させるように。別の者の配下ではないかと示唆する。

「共犯であるものの、目的は違うという話かもしれないな」

「子爵は王位、王女は貴方を？」

「ラシャ王子は、駒に使われたことになる」

3両目の馬車に乗っていたマキトは、馬車が止まり、外が騒がしいことで

こっそりと降りていた。

近くにいた騎士には、大丈夫だからと促し、2両目の馬車の後方でラゼス達の話しを伺っていた。

ロツサが裏切っていた？本当に？

子爵の下剋上？

なんだか雰囲気シリアス過ぎて、俺には何が何だか。

ただ言えることは、この旅がピンチなんだ。

天使の思惑

今、目の前でラゼス、ラシャ王子、将軍や隊長達が話をしていたはずなのに。

辺りが暗くなったと思ったら、周囲の者達は時間が止まったように動かなくなった。

そして、周囲には音も何もなくなり、真っ白になった。上下左右どこを見ても、静かな真っ白な世界だ。

その世界にひとり、ぽつんと立たされている。

何故？

『久しぶりじゃの』

懐かしいとさえ思う声。

半年前、俺をこの世界へ女性化して落した奴、お年寄りのような話し方をする

可愛らしい天使が目の前に現れた。

思い出すと、俺の人生が狂ったことに対し段々と腹が立ってくる。こいつのせいで、俺は女になっているんだ。

「お前、今まで何してた」

声まで怒気をはらんでしまう。

彼女は可愛らしい顔で、しぐさで、俺の怒気を下げてしまうように作る。

こちらの方が大変だったぞと話し始め

『もちろん、あのバカの説得じゃ。やっと納得させて結婚したよ。長かった。』

天界は円満解決じゃ』

小さな体の腰に手をあて、鼻息荒くふんぞり返るしぐさをする。

それは、見た目は可愛いしぐさだ。

話し方が年寄でなければ。

『そして、ついに主を元の世界へ戻せる時が来た』

こちらの都合で申し訳ないと、ペコリと頭を下げられた。

「元の世界？」

『済まなかったのう。やっとお主を帰す段取りが出来た。良かったのう。』

ところで、元の世界では、かなりイケメンを目指していたようじゃったが、

女性になったことで、女性の気持ちも理解出来たであろう？

イケメンもいいが、女性をどのようにゲットできるかのコツも分かったのじゃないか？

どうじゃったかな？その姿形は、お前さんの理想だが

何と言っても私が作った最高の傑作じゃ。

この世界の女神をイメージしてみたのじゃ』

「女神。この世界の女神は、この姿だったのか？」

『ああ、そうじゃ。主のその姿は前よりもバージョンアップしておる。』

特に胸が。お主の希望でマスクメロンサイズじゃ。

スタイルも抜群で、これほどの美はないだろう？

まさしく天界の女神の姿のようじゃ。

前にも別の天使が、ちと拙い事をやらかして、迷惑をかけた人物に好きな姿を選ばせて

その姿にして、この世界へ送り込んだ。その時は、その者から女神の力をせがまれて
およそ1年、やることもないからと、この世界で女神活動を自発的にしていたな』
遠い目をする天使に、俺は呆れた。

そうか。1000年前の女神伝説は、この天使達の仕業だったのか。
しかも天使が起こしたミスで、被害者がいたんだ。
女神だった人は、この世界のあまりに酷い事情に、自分がなんとかしたかったんだろっな。

俺は何も力がなかったけど。

『いやいや、癒しの効果はあったと思うぞ』

「見たたのか？」

『もちろんじゃ、この世界は私の管轄。世界の成り行きを静観するのが仕事。』

主は、この世界に希望を齎した。立派な功績じゃ』

では、元の姿にというところで、俺は後ずさった。

手を掲げようとした天使は、俺の不自然な行動に驚いた。

『どうしたのじゃ？』

「ま、待ってくれ。俺は、まだ戻れない。ユーシイを助けてからにしてくれないか。」

まだ返事もしていないし、別れの挨拶も
動揺する俺に、天使はわははと大笑い。

『何、気にすることは無い。あの者はあの世界での役目はもうすぐ終える。』

主が気にすることはない』

役目はもうすぐ終える？

あの世界の未来を知っているか？

「どういうことだ？ユーシイは死ぬのか？」

『神が作りし世界だ。管轄している私には未来は分かる。』

ただ、未来はその世界の人間次第で変わるものだ。

だからその男がどうなるのかは、はっきりはせぬ。ただ、今の時点では、

大きな戦に巻き込まれて瀕死になるのは

決まっておる。介護した者と一緒になるから安心せい』

それはここにいる自分ではない、お前は元の姿に戻って帰るから

彼には、別の女性が助けられるという話に、俺は泣けた。

俺ではない他の誰かに助けられ

俺ではない他の誰かとユーシイは結ばれることを悔しいと思っている。

男の癖に、バカな奴だと思われてもいいくらい。

初めは目に涙があふれてきてポロポロ、そのうち手の甲で拭っても流れて

声 が 漏れ出し

ワンワンと大泣きした。

元は男だから、彼を好きになることは、本来おかしいことだ。

ただ、自分は女性だった。

転生していると言ってくれて、女性だと言ってくれて

危険な時は助けてくれて・・・。

『おいおい、すっかり乙女モードじゃな。お主、元の男の姿に戻れるのじゃぞ？』

どうした？嬉しくないのか？』

嬉しいけど。

嬉しいはずなのに。

俺は土下座した。

俺は最期まで彼を助けたいと。

そうしたら、この世界でのマキトを消滅させて欲しいと。

『その男を助けてから、消えたいと言うのじゃな』

「ああ、そうだ。あんたのせいで俺はいろいろ大変だったんだ。俺にも猶予が合っても

いいだろ？」

変な天使の結婚話のお蔭で、俺は現代では味わえない生活を強いられた被害者だと

大声で叫ぶと、天使もそうだなあと納得顔になってきた。もうひと押し。

『ちよつとここで待て。上司に聞いてくる』

天使が姿を消したことで

俺は気が抜けた。

疲れてその場に横になり寝入ってしまった

体を揺すられ起こされてようやく我に返った。

小さな手を見て、可愛い顔を見て、なんだか不思議な気分になった。

「ん？」

くりくり目の可愛い天使は、予想を裏切る残念なお年寄りのような話し方を始める。

『上司と相談した結果。願いは聞き届けられた。』

なにしろ、こちらの不手際だ。多少大目に見るとのことじゃ。

お主には、女神の力を使えるようにした。祈れば、大抵はその力は発揮される。

ただし、殺生は女神ゆえ出来ない。倒して気絶させるが限度じゃ。一応、未来を教えると、こちらの戦いは半年後に終わることになっている。

未来というのは、常に変えることが出来る。

その者の考え、行動次第だ。

主がその男を救い、主の姿を消滅させることに天界は承諾した。自分なりに考えて過し、

最後の時は祈りを奉げて消滅の意志を示せ。

期限は、今より8か月。これは、女神の力が使える期間であり、強制消滅も兼ねている』

「8か月？1年でなく？」

ブーブー、文句を言い始めると、可愛らしい天使の眉間にしわが寄った。

『あまり期間を長くすれば、元に戻る気が失せるぞ。微妙な期間じゃないか？』

よく考えてみると。

「言われると、そうかな」

『それとも女性として、主、この世界に残るか？』

その選択には、一瞬迷いがあった。

この世界に残る。

それは、俺が女として生きる選択。

「俺、男で・・・」

『生まれ変わって、再度出会うというのはどうじゃ？』

「生まれ変わる？」

『主は、気付いておらんか。すっかり乙女モードになって、恋してるようじゃ。』

俺とか言っつて、男に拘るようなら、その男の部分の記憶を消すことで、

全てを変わらせてみるという選択じゃ』

俺は、何故迷っている。

男で生きて行きたい気持ちと、こちらの世界での女性として生きてい気持ちに。

俺は、どちらを選びたいんだ。

『ここで迷うとは。人間の感情の不可思議さかの・・・。』

8か月後、どちらの選択をするか再度聞こうかの。時間じゃ』

天使の最後の言葉で、周囲は白い世界が崩れ、時間が止まっていた世界は

鳥のさえずりと共に、動き出した。

俺の意志は、神に尊重されたのか。

8か月後、男としての決断の時。

女神の力

ふと顔を上げると、ラゼスさんとロシア王子に、エリクシアル国の騎士団がいる。

どうやら嵌められたという言葉が聞こえる。

それも信賴していた警備隊の仲間の裏切りで、窮地に陥っていると。この場面は、天使に会う前の・・・。

こちらの世界へ、天使は戻してくれたんだ。

これから8か月、俺はユーシイを助けなくては。

絶対に死なせない。

それにしても本当にロツサさんが、ラゼスさんの事を逐一報告していたのだろうか？

俺はどうしても知りたくて、天使が与えてくれた女神の力を使いラゼスさんの窮地を救いたいと思った。

裏切り者だという事が、子爵から將軍へ渡された手紙で分かってしまっている。

わざわざ報告された手紙を將軍へ渡すということが、おかしい。でも、ここで勝手な行動を取れば、皆に迷惑を掛けるし。

長い時間、彼らはロシア王子のテント内で話し合いがもたれた。作戦としては、手紙の通りに事を進め

王弟の人質役をそのまま続けて

王都へ入り、なんとか第1王子に会う。
宰相の事も気がかりで、屋敷へ潜入班と、盗賊を嵌めた男の存在も同時に探す事も
將軍は指示する。

再度、ラシ工村にもロツサを確保する必要があるが、この時点で逃
げている可能性もある。

何故ロツサが裏切る行為をしたのか気になるし、
手紙の内容からは、俺に気が向くようにした内容だとラゼスさんは
言っている。

王弟とその腹心に近い仲の將軍の軍隊を反逆者として
祀り上げて、市民を巻き込むことも考えられる。

そんなことをして、喜ぶのが宰相代理のバツフェル子爵？
否、子爵の上をいく人物がいるような気がしてならない。

ロツサは、その上の人物から指示を受けているように感じる。

ロツサをラゼスさんの前に連れて来たい。
どうすれば。

ああ、天使は最後に言っていたな。

『祈れば、大抵はその力は発揮される』

「マキト。気分でも悪いのか？」
ふいに頭の上から声が掛かった。

現在、俺はテント前で簡易椅子に座り込んでいる状態。

今夜は野宿になる。

周囲は軍隊の野营地かとし、あちこちにテントが並んでいる。

その中、バーシヤランのテントで、侍女達と過していたが、どうしても気になるので

沈黙していたのを心配されたようだ。

「侍女長が夫人の様子がおかしいと呼びに来たぞ」

「ごめん、ユーシイ」

「大丈夫か？ 済まないな。どうやら国の内乱になりそうだ」

ラゼスは、頬を緩めマキトの頭を撫でる。

マキトには、その存在で癒す力があるのだと天使が教えてくれたこともあり

不機嫌そうな男の顔に、笑みが戻ったことで気分が少し上昇だ。

「ユーシイ。俺は、まだ言っていないことがあるんだ」

今天使から得た期限付きの力なんだけども。

「ん？」

「俺は、祈りの力を持ってる。ロツサをここへ呼び込もうと思う」

「祈り？」

コクンと肯定の意味で頭を上下させた。

「祈りの力とは？」

「今まで俺には何もなかったんだ。でも、今天使が俺に一時的に力を与えてくれた」

「天使？」

「ああ。俺は、ユーシイの力になりたい」

「マキト」

「だから、祈る。ロツサに聞きたいんだ。半年一緒にいた仲間だけでどづづつして

こんなことになったのか。何か弱みでも握られているのか、聞いた
いんだ」

警備隊で裏切りがあったとは、信じたくない。

だから俺は、説明を聞きたい。ここへ彼を導いてくれ。俺とユーシ
イの下へ。

それから、夕食を取り、各自テントで休息。

すっかり夜の闇が訪れ、真っ暗で見張りのたき火の灯りしかない中
見張りの騎士が旅人だと言い張る男を確保してきた。

「離せ」

喚いて暴れているが、聞き覚えのある声だ。

將軍、ラゼス、ラシャ王子、両国の騎士隊長の前に、その男は騎士
に両腕を掴まれて
やって来た。

本当に、祈りは届いた。

その周囲は、明るくなるように火が灯される。

マキトは、テントから少し離れて聞き耳を立てた。

「ロツサ、どうして旅人になっているんだ？警備隊の仕事はどうし
た？」

ラゼスは、彼に質問を投げかけた。

しばらく沈黙を続けたが、目の前に伝書鳥で飛ばしたはずの手紙を
出され

ヒュツと息を呑んだ。

「どうして、それが」

「ロツサ、お前の字だな」

「ああ」

「これはバツフェル子爵が將軍へ渡したものだ」

「何だつて？あのキツネめ」

チツと舌を鳴らし、観念したように静かになった。

「俺を煮るなり焼くなり、どうぞ」

その言葉で、裏切つて開き直つた人間としてラゼスは認識して肩を落とした。

本当に裏切つたんだとか、仲間だと信じていたのにとという言葉を飲みこんで。

ラゼスさんは、俺がいない時でもロツサや他の警備隊も仲間だった。

この半年という短い期間だったけど、俺も楽しかった。

5人の中のムードメーカーだった。

それなのに、全て嘘で、スパイだったかと思うと、悔しい。

俺は、テント前に来るとテント前の騎士の反対を押し切つて入口の幕を翻した。

中に居た全員が驚いている。

なにしろ、癒し系美人でメロンの女性が怒って入って来たのだ。天使の言うところの女神が怒っている。

「ロツサ。それは本当なの？」

俺は怒つて、いつの間にか縛られているロツサの襟首を掴んで

左右に揺する。

「う、え・・・ぐ」

「全て吐きなさい。誰の指図」

吐け、吐けと念じながら、揺すったことで、ロツサが白目を向
きそうになり

ラゼスに慌てて襟首を持ち上げる手を止められた。

「ぐふっ・・・う」

「ロツサ、誰に頼まれた？リーシェ姫？」

俺が頭の中に浮かんだ名前を叫ぶと、体を竦めた。

おいおい、いきなり確信かよ。

「リーシェ王女から頼まれたというのか？ロツサ？どこで会った？
身分からして、お前と王女が出会う機会はなかったはず」

將軍が睨むと、ロツサは尻もちをついた形で頂垂れる。

「半年前、村で」

ポツリと零した言葉に、ラゼスは顔を真つ青にさせた。

様子のおかしいことに気付いた俺は、俺を掴んでいた腕を外して
近くの椅子へ座らせ、控えていた騎士に水を頼んだ。

「村で滞在していた間に、お前が会う機会があったというのか？」
將軍は、そのまま問質を続ける。

「ああ、呼び出された。俺は、どうしても来年婚約者と結婚したか
った。

俺の家の事情を出されて、要求を飲んだ。飲まなければ、婚約者が
他の貴族へ

王女が・・・うっ」

「お前の実家は、男爵だったな。この辺境の地へ行かされたという
ことは」

「ああ、資産も少ない危ない家だ。婚約者は、同じ男爵家だが条件
が良ければ

父親が相手を替えるだろう。それを逃れる為に、多少割のいい仕事
として

引き受けた。王女は、婚約者の彼女の父親に条件の良い侯爵との縁談をさせると

言うてきた。だから、俺は王女のスパイを引き受けた」

村でのラゼスとマキトの生活状況。誰が訪ねてきたとか、弱みを調べたり。

王女がマキトを侍女にという話しを条件に出した場合、

隣国の王子がどう動くのかも計算づくだった。

王城内がおかしいのは、もう1人隣国へスパイしている騎士が

王の庭から盗んだ花の成分で、操っていること。

子爵が宰相の代理をしているのは、宰相を毎日少量の毒入り茶を飲ませて

体調を悪くさせたことによること。

飲ませたのは、宰相の2番目の側室。子爵の姉。毒だとは知らないで、飲ませている。

王の体調が悪いのは、王女自ら介護をしながら、毒を飲ませているから。

他の王子も王女もこの事実知らない。

全て暴露されて、聞いた全員が絶句した。

その先がどうなるのか予想していないのか。

女の考える事だから、爪が甘いというか、ロツサが自供するとは思わなかったのだろうか？

「予定では、ラゼス公もラシャ王子も今の時点で亡くなっているはずだった」

魔獣は、王女の味方をしている魔術師が捉えて、王女に味方する者

達が

この地へ放した。

ラシヤ王子が、村へ到着した頃の話だ。

負傷しながらのところを盗賊団に襲わせて。

そして、そこへ到着した自国の騎士団の軍勢で、王弟を救出、隣国の軍隊と王子を捉える
手筈だった。

「今、俺が捕まったことで、いろいろ計画を練り直すだろうな。

俺は、子爵にしてやられたわけだし、王女も子爵に反撃されていると思う」

「つまり、ここまでの計画は王女だが、計画が失敗した場合は、子爵はこの国を乗っ取るつもりということか？」

「そうだろうね。俺がその手紙を出したことをバラしたんだ。もしもラゼス公が生きていたら、調べられるから直ぐに自分が捕まると考える。

それを反逆者として、直ぐに広め、丁度王女が王の体調を崩させているし

宰相もいない。やりたい放題だろ」

それにと付け加え、ロツサは後ろへ顔を向け

「今、伝書鳥を飛ばした奴が、子爵のスパイかな」

バサバサと、鳥が羽ばたく音がかすかに聞こえる。

伝書鳥は、夜目が効くので、夜の闇でも放すことが出来る。

将軍がすぐさま入口の幕を開け、伝書鳥を飛ばした騎士に向かって走り出した。

俺は、伝書鳥が城へ向かわず、このテントへ戻ってくるように祈っ

た。

俺の下へ、来い。

囚われの身

目を覚ますと、驚いたことにテントの中ではなかった。慌てて体を起こすと、天蓋付きのベッドの中。

一体、あの後、何が起きたんだ？

着ている物は、昨夜着ていた服装。

どうやら寝ているうちに、この部屋へ運ばれたようだ。

どこかの貴族の屋敷らしい。

そう思うのは、学校の教材で見た貴族の屋敷内装に似ているからだ。頭がふらつくが

ベッドから降り、土地勘はないが、どんな所なのかを確認しようと装飾家具を通り過ぎ

装飾された豪華な窓に近づき、3Mはあるかなと思われるカーテンを引く。

意外に重いカーテンで、今の俺には体力的にきつく感じた。

「う」

既に太陽は高い。

影の出来方での方角と高さから考えると、10時位と言ったところか。

逃げられないか窓を開けようとするが、開けられない。

窓から外を再度見るが、地面までは遠い。

体調が悪く通常通りの走りとかは無理だ。

それに何故か頭が痛い。モヤモヤ感がするのは何故なんだ。

いろいろ考えようとすると、気分が悪くなる。変だ。

ガチャリ。

扉が開く音がして、中へ入ってくる靴音で振り返った。

「おお、美しい。まさに女神だ。気分はどうですか？夫人」

大臣？貴族？と思わせる服装にマントを羽織った細身の男が近寄ってくる。

顔は、普通。どこにでもいる顔立ちだ。

「誰？」

男は近くまで来て、立ち止まり、俺の手首を持ち上げ、手の甲にキスを落とす。

その不快に背筋がゾゾゾ。

（気持ち悪い、触るなあ）

心の叫びを声に出したい。

男から手を奪い、カーテンで思わず甲を拭くと、男は笑う。

「ははは。無下にしないで下さい。この戦が終われば、貴女は私の妻になるのだから」

「はあ？」

何ですか？それ。誰が勝手に決めたんですか？

「貴女は、未亡人になる。私が身請けすることになっている。

私はこれほどの女性と婚姻出来ることは、嬉しいかぎりだ」

その視線は厭らしく、頭から顔、ゆっくりと胸へと落とされる。

やはり視線は、胸か。

気持ちは、男として分かるが、女の子の気持ちは非常に分かる。

こんな気持ち悪い視線は、気分悪いし

好意を持っていない相手だと、こんなに恐怖に感じるものなのか。体調が悪くて、いつもの力が出ないが

こんな優男なら、殴り倒してやるところだ。

「ちょっと待て。主人が、ユーシィ・ラゼスがいつ死んだのですか？」

もう終わったというのか？

俺が寝ている間に。

男は皮肉な笑みを浮かべながら、じつと俺の顔を見つめる。

「まだ。しぶとく生きている。否、生きていたとしても王女が夫にするらしいから。」

貴女は未亡人ではなく、離縁となるか。まあ、気にしなくても良い」

「気にする。あんた誰だよ」

一歩近づくので、一歩下がる。それを何度か繰り返しているので、部屋の中をぐるぐる回っている。

「これは口が悪い。その美貌で勿体ない。」

私は、この国の王になる男だ」

「何だって？」

「ロデイスと呼んで欲しい」

「家名は？」

「それは楽しみに。何しろ、家名を聞けば家名で呼ぼうとするだろう？」

私は名前を憶えて欲しいからね」

かなりの策士か。

「じゃあ、質問を変える。どうやって、俺をここへ連れてきた」
腰に手をあてて、威嚇してみると、男は苦笑。

「口が悪い。貴族ですから、なんとかしないとね。これでは困る。」

それで、連れてきたことで、どうやってか。それは、私に味方がいるということだ。

貴女は、ここへ私の部下に運ばれた。それだけのこと」

男が両手を軽く叩くと、別の扉から侍女が3人、ドレスを持って入って来た。

「私の婚約者を着飾って欲しい」

婚約者だと？

「はい、旦那様」

「おい、ちよつと待て。聞き捨てならねえ」

「貴女には、作法が理解出来ないようだ。教育係が必要ですね」

侍女が部屋の中へ入って来たところで、男はそのまま部屋を退室した。

体力的に叶わない状況なので、軽く侍女は3人がかりで嫌がる俺を捕獲し、

貴族風呂というものがある部屋へ引つ張りこんだ。

陶器製の風呂にお湯が張っており、その前に立つと、着ているドレスを脱がされ、

あたふたしながらお風呂へ入れられてしまった。

「や、やめろ」

侍女達もあの男の好みなのか、美人だ。

薄手のドレスを身に纏い、しっかりと手には洗う物らしい小さなタオルを持っていた。

「え」と

こんな美人な女性達が俺を？

とりあえず、湯船にドボンと先回りして入った。

「行儀悪いですよ」

叱られオプシヨン付きで。

旅をしている間は、体を濡れたタオルで拭くくらいだったから湯船は本当に物凄く久しぶりだ。

よく考えると、半年ぶりだ。

ついその温かさにうっとりしてしまっ。

村では、結局風呂作りは困難で、まだ計画段階だった。

木の汁で作ったという石鹸でタオルを泡だらけにして、風呂の外で待っていた侍女2人につこりとほほ笑まれ体中をくまなく洗われた。

「そこは」とか「う」とか声を出すと

その度に「我慢して下さい」と叱られた。

今までの汚れがすっかりと落とされて、本来の白い肌になった。もちもちしている感じがする。

水分を拭くにしても、外で待機していた侍女に、かなりしっかりとオルで念入りに。

ぐったりして風呂場から出たところで、先回りしていた侍女2人が、シルクの下着や煌びやかなドレスを着せさせる。

メロンがつかえたので、2人がかりで補正して。

何度か侍女達に嫉妬ありありな言葉を言われたけれど。

「う、羨まし過ぎます」

「うつつ、こんな胸になつてみたいよ」

髪が結われ、仕上がった。

全身が写る鏡の前に立てば、スタイル抜群で、胸がメロンで癒し系の顔。俺こそクラツときそうだ。

その胸に顔を埋めたいとか思うなあ。

ぎゅっとしたいとか。

3人の侍女達は、ほおと頬を染めた。

ああ、分かるよ。天使が言っていたから。俺から見ても美人だよ。うっとりするよ。なにしろ天使が作り上げた女神様だ。

だから、祈る。祈りの力を使わせてもらう。

俺の下にユーシィ・ラゼスを。

迎えに来てくれ、ユーシィ・ラゼス。

侍女が少し離れて、じっと俺を見ているので。

俺の味方になつてもらおうかなと考え、にっこりと笑顔を向けた。

「あ、皆さんはこの屋敷に長いの?」

振り向いて、ゆっくりと3人の前に近づく。

「は、はい。3年程」

「私とこの子は、4年です」

「私の事は、何か聞いてる?」

「いえ、その大事な方だから今朝早くに騎士が連れて来ました」

「騎士?知っている方?」

誘導尋問を掛けると、ひとりの彼女は俯いた。

「はい。この屋敷へ5年前から出入りしている旦那様の部下だとか。ここ1年は見かけなかったのですが、今日久しぶりにいらしたようです」

「名前は知ってるか」

「バンハト様」

ええ、バンハトさんは、スパイ？

俺は驚きを隠せない。

知っている名前で、一緒だからと疑ってはいけないよな？

「ちょっと待って、この屋敷の旦那様は、バッフェル子爵でしたよね？」

「はい」

カマをかけてみると、あっさりあの男の家名が分かった。

あの男が、バッフェル子爵。

バンハトさんと5年前からの付き合いだった。

いやいや、まだ俺の知っているバンハトさんとは限らないが
もしも俺の知っているバンハトさんだったら

ラゼスさん、悲しむよ。

それにしても、バンハトさんという騎士と俺はどこで会ったんだ？
記憶がない。

ロツサさんが、捕まった夜は昨日だ。

伝書鳥を飛ばしたから、テントへ戻ってくるように祈って

その後、俺はどうしたんだ？

そこから記憶がない。

考えると、痛い。頭が痛い。

俺は、耐えられなくなりその場にしゃがみこんだ。

「大丈夫ですか？」

「直ぐにお水をお持ちします」

侍女が1人体を支えてくれ、1人は水の手配、もう1人は椅子を用意してくれた。

大きな背もたれのある豪華な椅子へ座り、息を吐く。

「どうして、こんなに頭痛が」

侍女が持つてきた水を飲もうと、陶製のコップに手を触れるが違和感を感じ、つき返した。

きつと神の加護の力が働いたのだろうと思う。

無味無臭と思われる水のような液体なのに、俺の目からは黒い粉が水の中で浮かんでいる。

「あの・・・」

「水を持つてきて。これは、毒が混入してる」

「え？そんな。旦那様は薬だと」

やっぱり。あの男、言う事を聞かない俺を薬でどうするつもりだ？

「飲めない」

キツと睨むと、侍女は涙目になり、自分で井戸から汲んでくると告げて

扉から出て行く。

「あの、毒って」

侍女が不思議そうに聞いてくる。

「貴女達も気を付けた方がいい。これは頭痛を引き起こす毒。上手く考え事が出来なくなる」

「本当ですか？だから侍女長が最近調子が悪いって」

「な・・・に・・・」

その話を聞こうにも、気分は悪くなるばかりで、俺はそのまま意識を失ったようだ。

ユーシイ、助けてくれ。

王城の事情

第1王子クルス視点

辺境の地　ラシエ村から王城へ帰還して、しばらくして宰相が倒れた。

10日程城を空けただけだが、帰還してから40代前半の健康そのものだった

宰相の体調不良が続き、朝議中に。

必ず8時間睡眠を曲げない男で、健康には厳しい奴だったただけにおかしい。

絶対にこいつは死なないと思った程の男だ。

帰還して直ぐに、くどくど父上に説教をしていたのが思い出される。

父上が丸投げして逃げると、俺に矛先が変わって

「殿下、殿下もそろそろお考えください」

あの時は、どこの国の姫がお薦めだとか、俺の結婚相手を探してきてあれこれ話してきたなあ。

あの丈夫な男が、倒れるとは。

睡眠不足でなければ、食べ物の中毒か、病気か。

何かあったか。

正妻とは仲が良かったし、子供達も息災。

2番目の妻は、どうだったかなあ。確か政略結婚で、困っていたよ
うな。

医師の話では、内密に教えられたのはわずかに毒の反応が出たということだ。

ひそかに探れば、屋敷で過ごす彼の飲み物は2番目の側室が出しているとか。

その茶葉から、隣国の毒草が混じっていた。

毒草を全て盗みだし、今は医師に頼み込んで

治療用の茶葉を飲ませるように指示させて、ようやく快方へむかっている。

誰が企んだのか。

しかも、知らぬ間に宰相の座に宰相の2番目の妻の弟が代理をしている。

半年前からきな臭いことをしていて、当時宰相自身が困っていた。誰も反対しなかったのか？

紹介を受けた時は、驚いた。

「何故、そなたが？」

「元老院も推薦してくださいました」

にっこりと笑顔で返され、驚いた。

元老院側の大臣が数人、付き添っていたが、誰も何も言わない。

むしろ、何も言わず沈黙していて不自然な気がした。

その義弟について調べる手配をしたところで、今度は父上が倒れた。どうしてそうなったのか、これも内密に医師に調べさせると、第2王女が

誰もいない時を狙って、薬に麻薬の花 レリイシーの成分を入れていたという事実。

信じられなかったが、こっそりと隠れて様子を伺っていたら本当に薬を混ぜていた。

「殿下。今は医師がなんとか致しますので」

「解毒薬を手配します」

秘書的な事をしてきている事務官は、信頼出来る医師に話を通して来ていたからこそ。

この女、実の父親を殺す気が。と殺意を抱いた。

一緒に見ていた医師に止められなければ、背後から蹴飛ばしていた侍女や医師と相談し、第2王女がいる時は、必ず誰かがこっそりと伺うことになり

王女が退室したと同時に、王女が構った全ての物を取り替えていた。気が付いて2週間後から治療を始めたので、今は快方に向かっている。

それにしても、一体王城で何が起きているのか。

第2王子と第1王女を呼び出し、リーシェについて相談した。

「ええ、医師に言われて私も確認してきました。信じられなかったですわ」

「俺も。どうして父上を」

「もう一つ。宰相の件だ。代理でバッフェル子爵が朝議に参加しているし

いつの間にか指示まで出している。大臣達の様子もおかしくて、調べさせているが

隣国にある麻薬の花がどうやら出回っている」

「まさか。ラシャ王子に問い合わせは？」

「丁度、王都へ向かっていると、国境から伝達が来ていた。だが、こちらへ来ると言う」

話が実は来ていない。極秘なのか・・・」

「ラシャ王子がそんなことをするように思えないわ。ユーシィお兄

様とは仲がよろしくて

こちらの大学へいらした時は、とてもよくして頂いていたわ。

もしかして婚姻の話では？侍女達がリーシエが毎月贈り物と手紙を受け取っている

聞いてるわ」

自分に直接妹が話してくれることはないが、侍女達の噂を聞いたことがあると

彼女が説明すると、クルスは眉間にしわを寄せた。

「その話は、事実か？」

「ええ、リーシエの侍女達を呼ぶとはつきりするわ」

第2王女が隣国へ婚姻の条件を出していたとか、

実はバーシヤランからラシヤ王子が近いうちに尋ねて来ることは

宰相代理で止まっていたとかは、この話が出るまで誰も知らなかった。

「お兄様。もしかして内乱が起きているのでは？」

「ああ、王が倒れ、宰相が倒れ、実権を今握って動かしているのは、宰相の義弟だ。」

リーシエはその者に加担しているとなれば・・・」

「そこまで」

低い男の声が部屋の中に響いた。

3人と数人の警護の騎士達、お茶を準備する為に控えていた侍女達の反対側の扉が

少し開いていたところが大きく開いた。

警護の為、そこにいたはずの騎士が2人、回廊で倒れているのが見

える。

コツンコツンと靴音を響かせて、40代の宮廷魔術師ベナール・テオと

豪華なドレス姿の第2王女リーシエが
ゆっくりと入って来た。

「気付くのが随分と遅いようですね。それに、城の中は随分と無防備ですこと」

にっこりとリーシエは微笑んだ。

「リーシエ。どういうことだ。父上の命を狙って、お前は謀反でも企てているのか」

「リーシエ。どうして」

アリシャと第2王子ウエンが詰め寄るが、あははははと高笑い。

「どうして？私の恋を邪魔したのは、お兄様方やお姉さまでしょ」
叔父であるユーシィに近づかせない為に、いろいろと邪魔が入る。
調べれば、長兄クルスだったり、次兄ウエンだったり。
味方だったアリシャは、いつの間にか反対するように。

「だから、私は私の味方になる方と計画させて頂きましたの」

「リーシエ様、どうしますか？」

魔術師ベナールは、魔法陣を目の前に浮かばせる。

「もちろん。大人しくして頂くのが一番だわ。」

私がユーシィお兄様とこの国を治めるその日をぜひ見て頂かなくては
は

まるで悪夢を見ているようだった。

「リーシエ」

「リーシエ、考え直して」

くすくすと笑う王女に、子爵は平静を装って手紙を読みつつ
「女神のような女性ですか？本当にそのような女性がこの世にいる
ものでしょうか？」

普段見慣れている貴族社会では、そのような女性はいなかったはず
だと思っている。

「いるわよ。私は会ったことがあるもの。凄い美人だったわ。

スタイルも胸も男性好みだと思ったわ。

その目で見えてきてはどう？」

王女は子爵を揶揄してみた。

うーんと唸った子爵を後に、王女はその場から退出していった。

この同時刻、ラシエ村からラシャ王子達一行が出立して3日目のこと
だった。

救出

とにかく祈った。

無事に皆が、王城へたどり着けるように。

俺を助けに来てくれるように。

息苦しいけれど、俺は目が開けられなかった。

一体、俺はどうなってしまったんだ？

薬を飲まされていたのなら、薬が抜けるように。

俺には、祈ることしか出来ない。

呼吸も上手く出来ないし、体も金縛りにあったように動けなかった。

生暖かいものが胸をはい回っているが

それを避けることも出来ない。

誰か、助けて。

物凄い音がしても、俺は動けない。

目が回って、気持ち悪い。

俺の体の機能、頑張れ。

全貌が明らかになっていくので、こちらも計画を練った。

祈りの力を使い、フラフラになったマキトを侍女へ預け、俺達も就寝。

一夜明けたら、騎士達が大騒ぎしていて。

マキトは、誘拐されていた。

何故一緒にいなかったのか、悔やまれる。

一緒にいたはずの侍女達は、思考をあやふやにするとされる花の成分を飲んだ様子で

その毒が抜けなくて、未だ医師のところだ。

一体誰が。

イライラしているところに、当時結婚を迫られ身動きが取れない宰相に頼まれて

当時から離縁出来る機会を伺って欲しいと頼まれてスパイ活動も兼ねている

バンハトが朝の靄の中こっそりとやって来た。

誘拐したのは、バンハト。

マキトを連れて行った先は

王都よりも手前の貴族がこぞって建てた避暑地として有名な場所。貴族の屋敷群の1つで、子爵の親の名義の建物だと伝えられる。

「誘拐しなくとも・・・」

ちよつと怒っている言い方をするが、バンハトはあちらの騎士も兼ねているので

仕方がないと息を吐く。

「命には別条ないですが、1度起きた時にあちらの侍女が花の成分

を入れた水を

飲ませたので、意識は朦朧とされていると思います。言葉を発せないようにし

傀儡状態にいます」

「意志を無視してか」

「夫人は、美人ですからね。隠れて聞いていましたが、ロツサが子爵の気に留めるような

文章を送っているようです。かなり興味を持ち、王女とも密約し身請けをすると」

「何」

「そろそろ霧も晴れますので、これで」

バンハトは、そのまま子爵邸へ向かい、マキトの護衛をされると言い残し姿を消した。

そんな太陽が少し高くなったのを感じた時

俺にも何かの知らせが来たように、頭の中で救出の作戦が浮かんでくる。

どこが手薄だとか、屋敷の図面が浮かんでくる。

將軍に話をつけ、30人程騎士を借りて、数時間後バンハトの後を追った。

神の加護があるのか、避暑地には早々王弟や將軍、騎士達を阻むものがない。

ひたすら街道を抜けて、貴族の屋敷群を見渡す。

庭師に子爵邸を聞くと、早速その門を開けさせた。

「こ、これは、ラゼス公爵様」

出迎えた門番や執事は大わらわ。

ラゼスは執事の襟首を掴み。

「ここに俺の妻が来ているはずだ」

「な、なんのことだか」

戸惑い、私兵がバラバラと走ってくる中、先に着いていて

いつラゼスが来てもいいように準備をしていたバンハトが出迎えた。

「ラゼスさん、こつちだ」

執事の襟首から離し、執事がしりもちを付いている間に、バンハトの後を

ぞろぞろと追いかける。

バンハトが私兵の者達に、手を出さないよう合図を送ると皆沈黙。作業をしていた者や侍女達が手を止め、騎士達の動向を見守った。

そうしてようやくたどり着いた部屋は、奥の庭にある屋敷。

警備をしている騎士は、バンハトが指示するとその場を譲った。

「ここになります」

冒頭に戻ると、

マキトの世話をしている侍女達は、大騒ぎを始め、扉の前に立つラゼスを

止めようとするが、それをバンハトや他の騎士に止められる。

「でも、夫人は今・・・」

気分が悪くなつて気を失ったマキトを、侍女達はせつかく着たドレスを脱がせ

簡素な貴族用ナイトドレスに着替えさせて、ベッドで休ませている。そんな女性の部屋に、男性の方々が入るのはと、戸惑っているわけだ。

しかもそのナイトドレスに問題があった。

扉が開けられると、ラゼスも将軍も騎士達もピタリと動きを止めた。

そこには、天蓋付きベッドで気を失っているマキトの上の乗っている男がいた。

近くまで歩いて行くと、薄い生地 of 服装（貴族が就寝時に利用するナイト用ドレス）を

着たマキトは気を失っている。

その横だ。男はベッドの端に足を掛けている。

これからマキトの上に乗るかかるともりだったようだ。

俺の背後にいた、部屋へ入るのを止めようとした3人の侍女達も驚いている。

俺の顔を見た途端、硬直しているが。この男は、確かバッフェル子爵本人。

その彼の手に、皆が注目した。

マキトの服は胸元が大きく開いていて、その膨らみが8割が見える。

「お前、触れていただく」

つい思ったことを言ってしまった、隣りにいた将軍はピクリと肩を揺らし

背後では騎士達がどよどよと表現しようがない意味不明な言葉を吐いて

動揺している。

どうやら皆がその胸元に視線を送り、魅入っていたようだ。

俺が振り返ると、皆が視線を彷徨わせる。
將軍は、俺の肩に手を置き、目で抑えてくれと訴えてくる。

心が狭いか。と思い。

否、視線を子爵へ向けて剣を向けたところで、マキトがむくりと上半身を起こした。

「マキト」

嬉しさのあまり名を呼ぶと、同時に。

「てめえ、よくも」

という怒声と共に、子爵が蹴り倒された。

どこから足が？と目が追えば、ベッドで掛布団に隠されていたはずの足が太ももから出ていた。

その足がまた白くて長くて・・・綺麗で。

目、目の毒、否、目の保養に・・・。

そのままマキトは、ベッドからゆっくりとした動作で降り、フラフラしながら

俺と視線を合わせてきた。

その瞳は、まだ虚ろだ。

気分が悪そうに、立ち上がったもののベッド脇に手を付く。

「大丈夫か」

声を掛けると

ガサ、ガサ・ゴトン。ボタン。

「わわ」

駆け寄ろうとして、背後の騎士達が騒いで、何人かしゃがみこんだり、倒れた音を耳にする。
再度振り返ると、鼻から血が出てしまい慌てている者や、背中を向けている者。
赤らめて凝視している者。

「ラゼス公。奥方様に何か着る物を。まだ独身の者や経験のない者には刺激が強すぎます」

ラゼスは、え？という顔をさせて、將軍から助言としてマントを渡すように言われて

自分のマントを取り、ようやく合点がいった。

マキトが頭を横に振りながら、立ち上がると

ナイトドレスは、透けていて、その裸体をつつすらと見せている。

胸元のリボンが解かれ、大きく開けられているので、
8割型マスクメロンが2つ丸見え状態。

容姿もスタイルも女神のような美人女性を前にして、皆が動揺しているわけだ。

大きく息を吐いて、こちらへ視線を向けられると、

また儂げで美しい。

「ラゼス公」

將軍が必死にすぎるような声で叫ぶので、俺は我に返り、マキトの手を掴み、

体を支えた。

「大丈夫か」

マキトの方は彷徨っていた視線が、徐々に回復し、

俺と視線が合うと安堵の溜息を漏らしながらニコッと笑顔を向けてくれる。

その姿にボタンとひとり俺の背後で倒れたようだ。

意識がはつきりしてきたマキトは、鬼のような形相？ 皆には可愛く映るが

とにかく怒っていて、俺の手をゆっくりと剥がすと、

蹴り落されてもしぶとくこっそりと逃げようと動いている男の背後まで

素早く歩き、留めの一発とばかりにマキトは、ひらりとその白くて長い脚を

惜しげもなく透けたドレスから覗かせて回し蹴りをした。

俺の背後から「おお〜」とハートマークが付いたような騎士達の感動の合唱。

ガッ。

音も鈍く、痛そう。

まともに食らった。

「ぐああ」

断末魔の叫びか。

子爵は、今度こそ気を失った。

「ったく」

マキトの女性らしくない呟き。

だが、その振り返ったマキトの姿は……。

慌ててマントを掛けるが、遅かった。夫として出遅れた。

肌蹴かかっていた肩の布が腕にずり落ち、見事な2つのメロンを揺らし

足蹴りしたことで、腰辺りも捲れて白い見事な長い足も

騎士達に披露してしまったのだ。

「頼む。女性としての自覚を〜」

俺の言葉に、マキトは一瞬キョトンとさせてから「あ」と我に返ったようだ。

慌てて、胸元を隠すように足の辺りも気を付けながら、マントを引っ被るが、既に遅い。眼福した後だ。

マキトの今の姿は、周囲の雰囲気は大いに変えた。鼻血を出して鼻を抑える者、背後を向け精神統一している者、ぼおっと見惚れている者倒れている者味方の騎士達への衝撃は大きかった。

俺さえもその裸身に、しばらく見惚れてしまったくらいだ。

子爵は、捉えることが出来、救出も無事。バンハトにも再会出来て、マキトは祈りが通じて良かったと俺に告げた。

「後は、王城だな」
ラシャ王子達と子爵の屋敷邸内で合流し
今日は、そこで一夜を過ごすことにした。

裸身の刺激過ぎた影響は出たものの、戦意喪失にはならなかった。寧ろ、女神様がついていると、はりきる者達が増えた。

遠くで伝書鳥が飛んでいくので、この貴族の屋敷群の中に王女の味方がいるのだと知る。

「ユーシィ、呆けてないで。俺達は、俺達のやり方で王女の目を覚ませよう」
マキトの言葉に俺は救われる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1196x/>

理想の女性に、変身したかったわけじゃない。

2011年10月19日04時03分発行